

麻生路郎★編輯

大正十三年三月三日第三種郵便物認可

昭和十二年八月一日發行

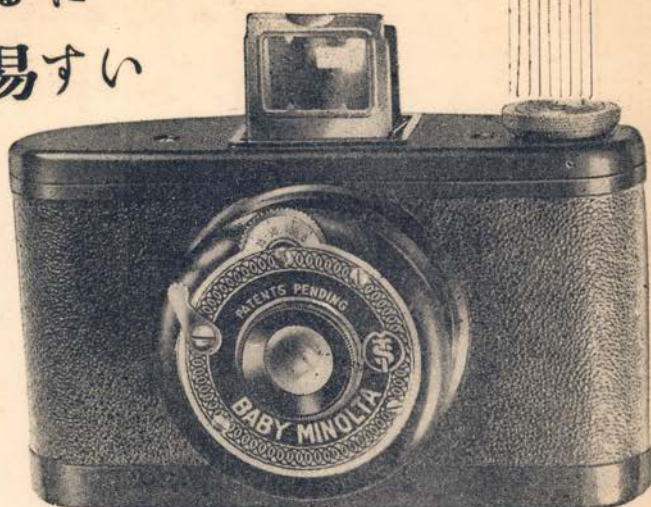
第十四卷第八號（毎月一回一日發行）

川柳雑誌

NO. VIII VOL. XIV

手に軽るに
寫し易い

ベビ
ミ
ノ
ル
タ



¥ 9.50

ヴェスト判兼用
3 × 4cm判

速寫ケース ¥ 2.00

カタログ進呈

淺沼商會

東京市日本橋區室町
大阪市南區順慶町

全國寫眞機店
百貨店にて販賣

誌 ♣ 雜 ♣ 柳 ♣ 川

號 八 第 卷四十第

不朽洞句稿

麻 生 路 郎

千人針胡瓜抱へた手でも縫ひ

玉出驛踏切にて

日ぐるまも兵を見送る如く也

わしの例ばかり聞かされ聾にゆく

煽風機金を忘れた風でなし

ピヤノ一臺買へぬお金で嫁が來た





川柳雜誌 八月特輯號目次

題字・路郎筆

文苑

川柳に見る親ごころ……………麻生路郎…(三)

ビー・ジャスト・アンド・フィア・ノット……………阿部佐保蘭…(四)

武玉川三編研究(八)……………梅本秋の屋
森東魚二……………(八)

浴衣がけ旅に……………蛭子省二……………(八)

川柳の翻譯……………安川久留美…(四)

桃太郎序曲……………笠原路生…(四)

密輸・飯進上……………石曾根民郎…(六)

裸體村……………大島濤明…(六)

句……………高澤一浪…(六)

髭の無い閣下……………正木琴舟…(七)

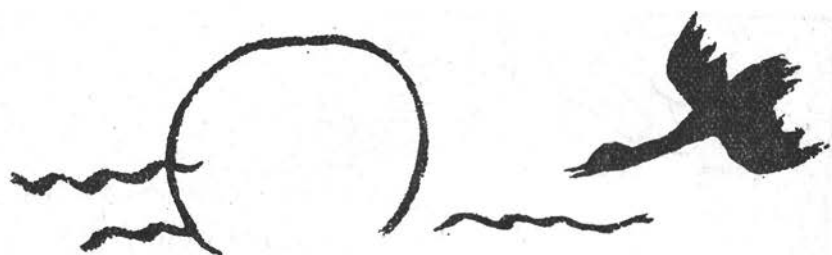
酒と女になる彩票……………岩崎柳路…(七)

満鐵を米櫃……………高橋月南…(七)

千萬長者……………日高阿喜良…(七)

量・質……………福田山雨樓…(七)

石田沐天…(五)



川・協・の・頁

川柳人協會……(一)

柳人素描……

(三)酒井大樓君……(四)富士野鞍馬君……(五)姫田夕鐘君

(一六)

へそくり帳

姫田夕鐘……(一六)

漫書セク
シヨ喰ひ過ぎ
押しが強い
燈管ばやり

小川 武

甲貝スミ男……(一五)

北 幹夫

青空の下の句會

川柳横町

朝田新水記……(一七)

不死鳥……(一八)

創作

不朽洞句稿

麻生路郎……(一九)

川柳塔

丹路、霞乃、綠雨、艸樂、夕鐘、青兒、鮎美
民郎、悟郎、變人、八步、白峰、水車、豆秋
喜由、ライト、新水、小柳子、いわを、古弗
久留美、可宵、柳秀、棕影、久米雄、蛇の磨

(三〇)

近作柳樽

麻生路郎選……(一六)

一路集

會海

計

大島濤明選……(四三)

橋本綠雨選……(四四)

各地柳壇

(四四)

川名古屋支部の創立

吉田水車記……(四四)

柳界展望

川柳書架

(二六)

柳誌要目

社關係の人々

(二八)

編輯縱横

川・雜・案・内

(二九)



川柳の翻譯

(習作)

笠原路生

川柳はもつと外國に知られていゝものと私は思つてゐる。近頃俳句は佛蘭西で一部の人々から異狀の興味を以つて研究されてゐるやうだ。本年ジュリアン・ヴォカンスが *Le Livre des Haï-kai* (俳諧の書) と云ふ句集を出版してゐる。最も日本の俳句と一寸其考へ方なり又ものの見方がちがうが、三行詩をいくつも並べてある型式で書かれてゐる。後藤末雄氏が「清長」「寫樂」「春信」「歌麿」と云ふ題でこの句集に書いてゐられるが、およそ日本の俳句とは縁遠いものである。

日本の俳句を翻譯するには全く自由な型式で翻譯すべきものであらうと思ふてゐる。多くの外國人が字句通り最も忠實に日本語を他語に翻譯すると往々意味のない變なものが出るやうだ。その例として最近出版されたリリー、アベツグの YAMATO と云ふ書物の中から芭蕉の「古池」を翻譯したものを茲に掲げて見る。

Auf dem toten Teiche

Das Plätschern eines Froschs, der taucht.

(死んでゐるやうな池へ)

蛙がビシャンと水へくぐつた)

古池を「死んでゐるやうな池」としたとこはいゝとして、全體としてはこの翻譯



では芭蕉の詠んだ「古池」の感銘をうけることは出来ない。

川柳は短歌よりも又俳句よりも外國人には理解され易いものと私は信じてゐる。併しながら川柳のもつ味を理解せしむるには相當な困難を伴ふことは云ふまでもない。川柳を外國語で翻譯するには二つの條件が必要である。翻譯する人が詩人であつて、川柳をよく理解してゐる人でなければならぬ。翻譯してどの外國人にも理解されて詩味を感じる句を撰ぶことがこの際最も必要な條件になる。

左様なら戀の御辭儀はまた愉し (長崎 柳 秀)

長崎さんの句では私の好きなもの一つだ。これは割合に翻譯し易いやうに思つて、いろ／＼工風をして見たが、實際やつて見るとこれで中々むづかしい。「戀のお辭儀」はどうか出来るが「また愉し」の「また」でハタと行き詰つてしまつた。私はこの句をまづ習作として次のやうに書いて見た。

Adiu ! Adiu ! Gefiehet mein ! Voller Sehnsucht har' ich dein.

(左様なら！左様なら！私の戀人よ！)

多くの憧憬をもつて私はあなたを待つてゐる)

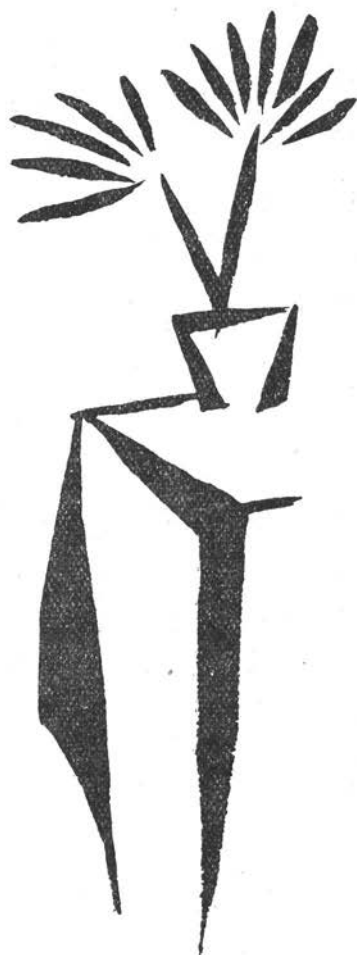
書いて見たが私は苦笑した。これでは長崎さんに叱られ相だ。第一に長崎さんのこの句にあらはれてゐる輕るい味が私の翻譯では出てゐないし、況んや「また愉し」と云ふ意味がこれでは少しも分らない。

川柳の翻譯は困難だ。この習作にもう少し筆を入れて長崎さんをせめて微笑笑さして見たいと思つてゐる。



樽 柳 作 近

選 郎 路 生 麻



ペンキ繪の抄りを見る乗おくれ	大 阪	阿 部	閑 生	積 立 の 最 後 を 掛 け て 入 院 し	同
豆靴で腹を蹴られて抱き渡し	同	同	同	次 の 場 の 雪 暗 轉 に 降 り は じ め	同
腕からげおろして母と行違ひ	同	同	同	食 堂 で 子 は 今 買 ふ た 劍 を ぬ き	同
たゞごとにあらぬ眠たさ稽古本	同	同	同	幼 稚 園 行 を 見 送 る 一 家 無 事	同
五十過ぎては履歴書らしからず	同	同	同	プ ラ タ ナ ス 馬 を つ な い で 暮 れ か へ り	同
綴ち足してあるだんじりの寄進帳	同	同	同	愛 犬 に 引 き づ ら れ た る 停 止 線	同
監督の裁きにやつとレール越え	同	柳 大 門	同	柏 餅 苦 勞 し て き た 話 き く	同
獨り者たつた一つの茶碗割り	同	同	同	小 手 か さ す 氣 に は な れ ない ロ ー プ ウ ェ ー	同

岩 橋 岩 石



高飛車に出られ約束して終ひ	愛媛縣	由利 孝輔	サインマニア此所ぞと攻める奇聲	同
實際を言つたに巡査おこるなり	同		此所までを共に稼いで手切金	同
晝寝する時間を妻に頼み置く	同		有閑の海へのさばる季が来て	同
おちぶれて部屋に餘つた蚊帳を吊り	同		言譯のその手に乗つてやるも術	大坂 松枝 静波
頬杖の机へ金と書いて見る	尼崎	酒井 斗風	誓約書みんな會社の爲ばかり	同
両親が許す末子の無暴ぶり	同		策動のあの手此手の裏が見え	同
口紅もうすく看護婦長の戀	同		妻と連れ立つて聊か胸を張り	今治 長野 文庫
指の骨鳴らして友はどもるなり	同		趣味の友まだ本名は知らぬなり	同
迷信に負けて釜戸の位置を替へ	長野縣	林 幹	信仰篤く變人めいて居る	同
景品の模型別れた子进行	同		ぬれぬすみ濡れて歸つた道を云ひ	同 石手 河鹿
洗濯を途中で呼んだい、便り	同		運命が變なコンビの夫婦とし	同
表沙汰にすれば食へない泣寝入り	同		夕刊の香りもあつてビール抜く	同
寺男今日は電車で何處へ行く	松江	田中都之介	キャンピング遙かに陸じいを見つけ	長野縣 高峰 柳兒
イニシャルが二度目の戀も同じです	同		ラブレター愛國切手恩に被せ	同
うたゝ寝の顔へ蚊帳吊る足が来る	同		月見草釣れぬ余憤に荒される	同
なだめつゝ下駄を拾ふて呉れるなり	同		松葉杖柘榴は口をあけてゐる	今治 月原 宵明
仕舞風呂バスやテナーが入り亂れ	大坂	石田 沐天	掛軸をゆるる風があり腕枕	同



墓と並んで夕陽を拜む 同

灯取虫逃がしてやれば戻つて來 大 阪 今井 菊路

一夏を浴衣で送る氣の安さ 同

壁一重隔てゝ左翼右翼住み 同

表情の逆を信じる目の動き 兵 庫 林 朔 風

氣不味さの障子に當る夜の蠅 同

心のしゆみぬきをして下さい 同

新入社主任と酒の量が合ひ 大 阪 正本 水客

三人へ温泉の湯がちと溢れ 同

家へきてから水筒のお茶を捨て 同

案内を乞へば鉄の落ちた音 今 治 渡邊 曉童

蒲鉾板の表札にある何衛門 同

おちて行くところまでおちて行く氣也 同

蚊帳吊つて家族一同一つ部屋 下 關 多田市他樓

夜遊びの月に見つけた豆の花 同

薄情を今は感謝でよくねむり 同

父の手が疲れて歸る健やかさ 臺 中 宮内 耕朗

夕陽ぼつんと落ちて椰子高し 同

寝返つた子の足元へ陽脚伸び 同

酒、酒と何人生に僻むらむ 尼 崎 山田南濃路

視線合ふ女は自信もつ視線 同

藥瓶提げてる友の足早く 同

遠雷に相場を一つ聞きもらし 今 治 谷 心 府

信賴をしてゐる如く働かせ 同

孫ほどの子が長男として生れ 同

螢籠死骸を入れた儘を吊り 島 根 縣 米原 木馬

夏祭下界は白き人の波 同

弟の脊丈を知つた膳につき 同

女戸主旗を出す日に顔を見せ 船 本 縣 寺田 宗正

貞操を男の母にうたぐられ 同

そうめんを食べて涼しい小人数 同

構内の櫻待つ間を楽しませ 兵 庫 縣 酒井美知夫

どのひげも皆米代をかせぐ髭 同

煙突の工事妻子のある男 同



しがらきを裸で呼んだ舞臺裏 大阪 富本 無煙
 オイコラー 僕でなかつた交又點 同
 和睦してちまきを貰ふ紙兜 同
 ハイキング 遅れがちな脂肪過多 今治 綾田 三郎
 黒卒へよく飲んだ頃俤ぶなり 同
 圓本の 衰微本箱棚 淋し 同
 僞りのくらしに先が見えて来る 大阪 畑田よし江
 ひめくりの次の休みも金が費り 同
 地下鐵で來てデパートの客になり 名古屋 星野 兄兒
 針山へ來た子それ／＼と追ひ 同
 よい天氣朝のきげんへ來たハガキ 同 内田 元子
 家庭欄やがて生れる兒を思ひ 同
 大きな聲で百點戻つて來 大阪府 妹尾イクエ
 子の寢言海を泳いでゐるらしい 同
 上阪のゆめへぼつぽと汽車が出る 島根縣 森山さわだ
 妻も子もある忍從の席に座し 同
 人混に財布握つた手がしびれ 岡山縣 大森千代香

酔ひどれに危く光る水にまり 同
 旅戻り寝た子へそつと土産置く 長野 高野登至路
 新柄へ母と娘の選り好み 同
 スポーツマンと聞いてかゞ娘の瞳 愛媛縣 笠崎虹架子
 あきらめを最う知つてゐる片育ち 同
 愛の巢の城壁といふ薦かづら 奈良縣 島田 翌峯
 五十年二一號のまゝで年を取り 同
 食べかけたところへ會社の違ふ笛 名古屋 稻垣 正穂
 末ツ子に先を越された洗面器 同
 遺産あり出世の道をうとんずる 大阪 難波南海男
 一回は立たない事にしてしきり 同
 洗面の向ふへビヨイと蛙逃げ 大阪府 大阪 形水
 大阪の路地は汚れた雨が降る 同
 蠟燭も線香も無事にゐてほしさ 大阪府 宮岡 公子
 言譯を考へてゐる子の寝冷え 同
 打水へコスモス倒れさうに立ち 廣島 得能 紫浪
 配達夫付箋の家で汗をふき 同



お世辭の多い女の細い眉	布 緒	岡山	和夫
特價品あさる手の指よく動き	同		
相合の傘はそのまゝ辻を折れ	廣 島	野田	昇玉
子の寢息盗んで羽織そつと掛け	同		
描眉毛 コーヒ 位ですまさぬ氣	今 治	渡邊	芳岸
描眉毛死なした子供一人あり	同		
信號は青傘・傘・傘と續きけり	大 阪	馬淵	龍城
葉櫻に折るべからずは春のまゝ	同		
子の事になると見給へ父の顔	丸 亀	馬場	浪二
握る子の手から洩れてる蟬の聲	同		
夕立をバスが追ひ抜く田舎道	兵庫縣	戸倉	普天
三階が靜まつてから河鹿鳴く	同		
電車道渡つて女ホツとする	大 阪	庄司	淡路坊
請求書かくペン先の好き嫌ひ	同		
夕涼四十女の肉の張り	朝 鮮	弘津	慶一
朝からの雨へこのまゝ流連ける	同		
微笑んだだけの戀をば見送りぬ	兵庫縣	加茂	柳扇

僞はつて心に悔のある若さ	同		
はさまれた子供小蟹をふみつぶし	愛媛縣	岡田	浮草
中心になれば人格非難され	同		
トーカーの霧一ぱいに泣く女	名古屋	水田	蕪人
晝來れば射的の女髪を梳く	同		
先妻を想ふ矢車草を植ゑ	山口縣	三原	狂路
うまそうに重湯を呑んだのが別れ	同		
話あきしたのが窓へむいてゐる	大 阪	黒川	紫香
パツクリと喰べられて麩の味氣なさ	同		
田よ畑よミリタリズムの納税だ	長野縣	金井	有爲郎
植木鉢青し子のない老夫婦	同		
濱寺へ水着の姿見せにくる	大 阪	大 西	洋
流行唄覺える閑もない位	同		
鯛へ自轉車下り道となり	石川縣	松本	文太
涙いま飯の不味さへ落ちるなり	同		
何の日か一軒だけが旗を出し	大 阪	北川	春巢
人間の不覺樟腦に頼り過ぎ	同		



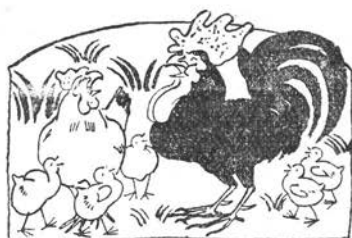
三年目添乳のままで聲をかけ	大阪	泉流葉
二十六皆んなに噂立てられる	大阪府	大島 石脚
うまずめの猫を飼つたがまだ淋し	廣島	奥富 天作
病床に天井板の數も知り	大阪	野本 香水
乗合が出来て掛け茶屋くちたま	同	竹内美津枝
貧乏が夏の日長を短くし	尼崎	薦野 雨聲
すねる手も覺え一人前になり	下關	北坂香津帆
婚禮をみるあの娘ももう二十	東京	風間 花盈
海水着で困つてる乳のかさ	長野縣	佐二木千隈
タンゴなど目をむく父の國粹派	島根縣	山本 勇坊
海水着泳げぬ人と砂にゐる	尼崎	飯尾 紫浪
蚊も同じ盃へ來てのんで居り	大阪	丸尾 潮花
死ぬのなら稼ごう小遣儲けよう	同	山本 莖光
氷屋の機械止つて下駄の音	同	古寺謙南坊
戀人があつて療養所も樂し	豊中	金田 並木
禁酒誓かはせて父赦すなり	島根縣	伊藤 佛心
砂の感覺童心にふれてゐる	神戸市	藤井 徒步



閑生君の「腕かげ」の句には思はず微笑まされた。大門君の「幼稚園行を」採る深酷な人生の斷層を心憎いまでに巧みに描出してゐたこの作者は近ごろ輕い寫生句ばかりを見せるやうになつた。幸輔君の句で「おちぶれて」がよい。沐天君の「此所まで」は限りなき、慾望と性慾との戦ひの破綻か。柳兒君の「月見草」の句はうれしい句だ。民郎君と云ひ、有爲郎君と云ひ信濃路の作家には自然から享ける力に恵まれてゐるのか詩情の豊饒さを見る。宵明君の「墓と並んで」はグロテスクの墓からユーモア味を發散してゐて面白い。南濃路君の「酒・酒」の句、ほろ苦き酒と世にすれた人の心との奇しきコンビへ一投石したところ、が皮肉である。

近頃面白い句だと思ふ。宗正君の進境まことに凄まじいものがある。「女戸主」の句、「そうめんを」の句共に佳句だ。殊に「そうめんを」の句によつて、作者の平靜な生活が偲ばれてならぬ。無煙君の「しがらき」は輕いスケッチとして採る。この作者はこの調子で當分作句を續けて見るのもいいだろう。

近來閑秀作家が殖えて來たがイクエ君の「子の癡言」は母としての心遣ひがほの見へて嬉しい句だ。翠峯君は體分古い作家だ。私がこの作家の句を見出してからもう十年以上になるだらう。浮氣つぽく、飽きつぽく、天狗にすぐなりたがる作家の多い中に黙々として作句、不斷の努力を續けてゐる斯うした作家のあることを忘れてはならない。「愛の巢の」でも「五十年」でも作品にあふない。 (略)



る見に柳川 るこ親

郎路生麻

(上) 理論を越した母性愛

世のすべての母親はチョコレートのように子に甘い。なぜ甘いか。母親は知らない。私も知らない。

うちの子に限つてといふ顔になり (飯山)

といふのがあるが、味のある句である。たとへば人様のものを、くすねたとか、左傾運動の嫌疑で引張つばられたとかした時に、うちの子に限つて、そんな大それたことはいたしませんと、キツパリといひ切つてくれるものは母の外にはあるまい。有難いかな母性愛。生れて一年四ヶ月ばかりで、母を喪つた私は、さうした母の愛を知らずに大きくなつたので、母性愛の句に接すると、理論を越えたその愚

かなる親ごゝろに譚もなくうたれてしまふのである。

耳はどこおててはどこと子に甘し (笑人)

パパの出勤を送り出したママは愛の結晶を終日愛撫することによつて人生に幸福を見出すのである。

逢うてやつて下さい坊や歩きます (石竹)

これは口語體の句であるが、この句からは複雑な感情の交錯、人生の明暗を汲みとることが出来る。暗い人生を辿つて來たこの母親の限りなき愛に想倒すると、思はず私生子の前途に光あれと祈つてやりたい。

ほろくとして小兒科の扉をあけ (零骨)

何ものにもかへがたい愛し子が、もしか死んだら?といふ強迫感にハラノして、裾もあらはに小兒科のドアをあけた、その情景真に迫るものがある。こんなにして育てられた子も、大きくなるとマルクスがどうの、國家の豫算がどうの、五五三の比率がどうのと母を忘れて騒ぎまはるのであるが、自己の若さまでも惜しみなく棄てゝ顧りみながらつた母親にとつて、そんなことはどうでもいゝのである。

いつまでもくこの子の母でありたいのである。嫁の聲であらしたくないのである。母の愛はそれほど深くて盲目的だ。

足踏んでいったまひ兒の女親 (閑生)

いんまのさきまでしつかりと手を繋いでゐた愛し子がまひ兒になつた。それはホンの瞬間の出來事であつた。それ

と知つた女親の驚きはたとへるにもものがなかつた。血眼になつて人ごみの中をあちこちと捜し求めた。それがために他人の足をイヤといふほど踏みつけたことを少しも意識しないのである。そこにこの句のつけどころがある。

舉手の禮我が子ながらも成人し (スエノ)

いつのいつまでも子供のように思つてゐるのが母親の常であるが、いつしか母親を凌ぐ背丈けとなつて入營した。はじめて休暇をもらつて歸宅した時には、もう一かどの軍人きどり、我が母にさへ舉手の禮をした。その雄姿をつくづくと眺め入つた母親の臉は涙で濡れてゐた。これこそ母親のみが知るよろこびの涙である。

(下) 愚にかへる父性愛

父も母も親ごころに變りはないが、父性愛は母性愛ほど盲目的ではない。

玉葱が坊の頭に似てをかし (緑之助)

玉葱を見てさへ、我が子を感じる——そこに父親らしいゆとりのあるのもうれしい。

末の子をあらの中へ入れて呑み (助六)

妻の魅力?といったものに、殆ど無感覺になりつゝある彼にも、末ッ子ばかりは眼の中に入れても痛くないと見える。「さあ来い、さあ来い」と晩酌のあらの中へ入れて愚にかへるところ、父性愛の好標本かも知れない。

その次は象の聲かと子へ困り (光路)

「お父さん、ライオンの鳴き聲をして御覽」「おほ、よし／＼ソラ、ウワーツ」と勇敢に吠え立てて見せる。次は何次は何と、次ぎ／＼にやつて行くところ頗る他愛がなくて全く他人には見せられぬ圖である。

不始末へ父はフンといつただけ (里十九)

いつまでも、こどもだとばかり思つてゐるうちに、親のゆるさぬ不始末を爲出かしてしまつた。が父は怒らなかつた。僅かにフンといつたゞけであつた。若いうちには有り勝ちなことだ。俺たちの若い時にもさうした過ちはあつたのだ。まあ、なんとか考へてやる——といふ父には父の肚がある。そこを掴んだのがこの句の巧いとこだ。

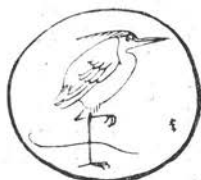
どこで覺えたか伴紀伊の國 (素人)

といふのもある。我が子の隠し藝に感心してゐるのである。粹な親父もあつたものだ。

○

私は晩春の書齋にあつて、しみじみと親ごころの句を味つた。両親を持たない今となつては川柳を通して親ごころに浸るより仕方がないからである。句を通して知るせつない親ごころを私自身父として實踐してゐることを思はされる。拙吟「おれに似よおれに似るなと子を思ひ」「子澤山僕の枕は何處へいた」の如きがそれである。

(大阪朝日より)



ビー・ジャスト アンド・ファイア ノット

阿部佐保蘭

懸命の努力で準備、三日前に無事川柳譚譯研究會創立記念句會を量的には少なかつたが質的には成功裡に終了した。僕は今本會顧問路郎先生へ寄稿の約を果すべく、傍に第二世の年昭の顔を眺めつゝこの稿を起し始めたのである。それは丁度今年の今時分のことである。私は牛込の遠い親戚を訪ひ、和洋折衷の應接間に待たされてゐたのである。始めて通された人が誰でも

する如く、僕はその部屋を見廻してゐたのでは勿體ない。

「Be just and fear not」の代りに、娘を賣つた金稻妻のやうに消え、即ち宮森先生の譯を借りれば

Inazo Niobe を書かれてある稲造博士のことらしい。そこでやがて姿を表はした叔母さん

にこの事を訊いた處主人在世中に博士に書いて貰つたのを表装したのだとの事だつた。その額が和洋折衷のその應接間にヒタリさあつてゐるのも面白く、今から十何年前に勇敢になされた新渡部博士の先見の明に敬意を表したのであつた。これから時勢が進むにつれて日本文明と西洋文明とは接近して行くばかりだ。男がオールバックになり女が斷髪になるやうに、そして川柳も世界的に進出する時が必ず来る。又そうしなくてはいけない、我々の心の糧となる文學たる川柳が日本内地文にくすぶつ

御後援の下に川柳譚譯研究會はその輝かしいスタートを切つたのである。

私はもう一度新渡部先生の御教訓を口ずさんだのである。

「Be just and fear not」

「正しくあれ恐れるな」即ち換言せば「自ら反して直れば千萬人と雖も我行かむ」この格言から柳界の爲獅子奮進の路郎先生の姿を憶ひ、且つ又自分自身を鞭うたのであつた。

(一九三七、七、一七)

浴衣がけ旅に

安川久留美

私の七月の日は七日の夕、突然に上阪したことが欣快喜悅の二日間であつた。初對面の東魚氏を誓得寺の僧侶と感違ひしたリ「寢臺」の題を寢臺車と範圍せまく扱つて作たり、大阪へ着く勿々だつたから、旅氣分が失

せなかつたものとも思ふ。席題の選み前に、何だか斷片的に喋舌つたのも強ち集りが薄かつたからの大膽さではなかつた。それでも話の内容に一致共鳴して下さつた東魚さんの頭も私と同じ丸刈であつたことにさへ懷しさをおぼえたのである。

「大體あたしは坊主か神主になつてゐればもつさズバ抜けて」會がはれて歸るきわに東魚さんの江戸ッ兒句調がお寺の門のくちやみに響いて聞えてゐた。

2 萬雄君が死にました？……」

瞬間一寸ほんさうにはならなかつた。この間紅太郎さんの思ひ出をさし野へ送つて餘日わづかの處へまた従弟の同君が四十六歳で夭折するなんて全く夢のやうなそれも大阪の精舎できくも何かの因縁あの若かつた時代の長い顔を想起して涙新しく、

暫し手向の句も泛ばなかつた。七夕の日に萬の家さうたきり幽明の客となつた萬雄君と私は、東京のさくら木會や、千鳥會、えびら吟社盛んなりし頃懇意にしてゐたもので、此世に生前最後にあふたのは合田笑字坊と一しよに彼の勤め先しやばんの會社を訪れて引ッ張り出し附近のバーに會飲した二十三年前だらうと思ふ。

馬方のしやがんで探す落し物男親まさいのやうに遊ばせる金鎖よんごころなく乳を出し等彼の名寫生吟をよみ出せば幾らもある。「すゞ蘭」の花咲く頃死んだ彼の「ひする」にはその花の繪の表紙に刷つてあつたのも淡い記憶である。

3 路郎さんと垂水にゐる俳人Kと肩を並べて舞子の濱を歩き、震んだ淡路島へプロペラの走る

のを眺めてゐたが「句」は生れなかつた。車中骨明氏が死んだ須磨の海を見て先年路郎さんさ胸井みの作庵に泊つて句作した古い／＼の記憶がよみかへつて來た。

寢不足は二人に話させて置き須磨の荒れ死んだ男が泣いてゐる

白い蚊帳名残りとならう須磨泊り

などの舊作さ二百十日頃の關西の初旅がそゝるに走馬燈の如く浮んで來た。

4 今度の二日の旅に神戸の紋太君さ、京都の二山君を訪ねられなかつたのは惜しかつたが、海はるか見えて夕迫る垂水の新開地、高丸丘で路郎さんとK氏と三人會合し、夜の九時まで雑談したことは、來年の夏になれば又追憶になる、うれしい日であつた。

垂水にて

砂いぢる君の子に吾子をまどるめる

借浴衣路郎に女柄を着せ

陶枕路郎の笑ひ苦笑あり

庭下駄をはけば垂水に夕迫る

霞山子の心つくしに松の風

量・質

石田 沐天

所謂「こがらしやあとで芽をふけ川柳」川柳翁逝いて百四十八年目の祥月が迫つて來た。柳句は量に於いて凄じい勢力を以つて全國に芽をふいたが、一方實質に於いては如何であらうか二百年後を約したのは大近松であるが、吾々は十年後に自身に問ふてすら不安な作句ではなからうか。此の意味に於ても目下本誌に三權威に依つて研究の續稿されつゝある武玉川の姿が

注目に値する。

へそくり帳

姫田 夕 鐘

今頃長二郎の人氣をとやかく云ふはちと戯異いきらいはあるが一寸思ひ出のまゝを書いてみよう。

長二郎と云へば十二三年前歌舞伎の畑で長丸と言つてゐた時分、知人の息子が長丸と同輩で勿論大部屋組で居つた。修業のために時々若い連中ばかりで天王寺の大道俱樂部や天王寺俱樂部で淨瑠璃の會を開いた。知人に頼まれるまゝに、その息子の語り口などを聞きに行つたが、若手の美貌揃ひの中でひと際目立つ美男は長丸であつた。

長二郎と並ぶと損な顔となり知人が息子の舞臺姿を觀てゐられぬ由を洩してゐた。息子は七

歳にして今關西の時めく人に弟子入をして十年の舞臺生活に毎月の稽古の費用や衣服等々を計算するに相當の額に昇りその舞臺なるものを觀に行くと當時は雁治郎一座ではあつたが役たるや申し上げますの女中なれば上の上で多くは其の他大勢に屬してゐることとて親としてちつと見るに忍びんと言つてゐた。なるほど親の氣持がよく讀める氣がした。長丸君も此の女中組であつた。此の頃に若手拔擢の意味で技藝座が生れ大御所ごころの検査役で出世の登龍門となつたので勢ひ競演となり力強い舞臺を見せた。その節野崎村が出で長丸はお染を演つてゐたが、藝々の物より天祐の美貌が今に眼の底に残る。たしかにその頃より準幹部に昇進したと思ふ。

この優はきつと名ある女形さして世に出るだらうと心ひそかに期待してゐたが暫時して映畫人

さなり今日の地位を築き上げた。始めは美男で賣出し最近には技藝でなほ地位を固めつゝある如く見上げるが、十年一日の如く映畫人進じての人氣の壓巻に今更ながらその永續性に驚いてゐる次第である。

一昨年であつたが長二郎の白井權八の實演が大劇であつた時僕もいつて見たが朝の九時さ云ふのに南北に長蛇の列、さても一時間位では遣入れそうにもないので引返した。當時ある新聞では花道の出を待つてフアンの娘連が毎日の様に足や衣裳に觸れて寄聲を發したと云ふ狂態を報導してゐたが有りうることだと思ふと同事にその人氣と云ふものの反應に一驚も二驚もさせられた。

長二郎が斷然好きな十八九先日も週刊朝日であつたと思ふが長二郎や大河内が今もなほ人氣の素晴らしいのは兩人共人氣の

ある大スターだから獨立プロダクションを起しても成功する人であるが自分へ授けられた仕事を忠實にこつ／＼と仕上げて行く心組が人氣を落さる譯ださ云ふ様な意味が出てゐたが首肯出来ることである。

桃太郎序曲 (中)

石 曾 根 民 郎

其後の桃太郎のはなしさいふのがある。

鬼ヶ島から連れて來た鬼夫婦に一人の娘が生れたが、桃太郎はお嫁さんに欲しくてゐるのを、犬猿雑子が心配して鬼夫婦に申込むと「桃太郎さんのことですからいやすまじませんが、まだいかに生れたばかりの赤ん坊ですから、粹な二人連れさといふわけにはまゐりません」いや、桃太郎さんのことですからお腰につけてまゐります」

桃太郎が鬼ヶ島へ行つて寶物をたくさん手に入れて來たと聞いて、俺もやらうといふわけに日本一のきび團子腰につけてゆくと猿に出合ひ、挨拶よろしくあつて「これは日本一のきびだんご」猿うかぬ顔で「こいつはうまくないやつだ」「鹿の子餅」桃太郎が鬼ヶ島の手柄に味をしめて、今度は龍宮へでも例の黍團子を持つて出掛けると猿に出合ふが「一つ下さい、お伴まうさう」桃太郎から受取つた黍團子を見て「モシ、小さくならしたの」「聞上手」

次のは其後の桃太郎ではないが、猿の狡猾性を揶揄した前二者と對照されるものであらうか。

犬と雉子は首尾よくお供にしたが、今度は猿に出合つての間答。「桃太郎さん、何處へいきれんす。おまへの腰のは何でえす」「日本一の黍團子」「一つく

んれんし」としやれるに、定めて猿も如もあるまいと、一つやれば「ア、うまい、も一つくんれんし」と、是も食つて「ア、うまかつた、何時でも來ねんし」

【壽々葉羅井】

大晦日の桃太郎は、鬼ヶ島の出立の入用金千兩の證文を猿や雉子に持参され、元利千二百兩を催促される。桃太郎はビクもせず、打出の小槌で「ソレ千二百兩」と打つて見たが出ない桃太郎暫く思案し「これは鬼ヶ島より取つて歸りし大切な品なれど、そちにやるぞ」

「千里の翅」

その他「桃太郎元服姿」「桃太郎大江山入」「八代目桃太郎」「桃太郎二代巷士」「桃太郎後日合戦」「桃太郎後日斬」「鬼太郎」などであると聞くが、芝居掛つた「新歌舞伎付桃太郎」の桃太郎への女鬼白姫の片戀經緯もある。

ハビイ・エンドで「螢の光」のジンタを背にしながら、活動寫眞を見て歸つた。かの日の昂奮は、返すすべもない若さであり、黎明時代ではあつた。

桃太郎勝利の悲哀ぶと感じ

（柳石）

たその後の桃太郎のうへにも、浮世のながれがまつわつてゐた桃太郎その後の話聞かぬなり

（心府）

そうでなく、英雄桃太郎もわれ／＼ともに苦しむがよいのではないか。「桃太郎」のハビイ・エンドの連弾に踊らせられながら、あゝ泣き笑ひの人生よ。

麻生路郎編著・柴舟漫畫

累卵の遊び

四六版一六〇頁・函入・通三十二葉

川柳の妙味を骨を折らずに味つて貰ふつもりで噛んで碎いて摺り餌にしたのが「累卵の遊び」であるさは著者の序文の一節である

大阪市西成區玉本通三ノ三六

發行所 不 朽 洞

振替大阪三〇三九二

千萬長者

福田山雨樓

六つになる男の子が突然「お父さん、一番大きなお金は何と云ふの?」「萬圓だよ」「もつと大きなのは」「萬圓」「もつと大きなの」「兆!」「もつと、もつと」「……………」

眼を轉じて見ると向ふの山に生ひ繁つてゐる喬樹には、數へたら億を算するであらう程の葉が風に揺れてゐるではないか。



武玉川三編研究 (八)

梅 本 秋 の 屋
森 子 省 二 魚

(124)

たいこか顔にすり付る 伽羅

東 魚 〓 これが伽羅ですか、など、わざと鼻などこすりつける様に嗅いだりする。少しおどけまじりにやつてゐる、幫間の姿が想像される。

秋の屋 〓 昔は遊女や幫間へ纏頭の代りに、伽羅の割木を與へたといふが、古い小説の中にある。

省 二 〓 遊女などに與ふる金の事を、伽羅の字或は伽羅代など、寛文の頃は言つたそだ。金錢の事を云ふと卑しむでの隠語で、吉原讃嘲記に「富める人を指して、伽羅多き人といへり、これは金銀をいへり」と。原句は隠語の伽羅でも亦、本當の伽羅木でも通じはする。

(125)

本陣のはるか奥より針の

東 魚 〓 本陣といへば、土地第一の旅館であらう。其所へ相當身分のある人が宿つた際に、按摩をとつた。其針治の代。僅かな錢を、店に待つてゐる針醫に下げ渡される。それもものゝ敷、奥深き處からといふのであらう。

秋の屋 〓 「はるか奥より」で、本陣の家屋の廣大なのが知られる。

省 二 〓 「はるか」が、この句に音楽的な響を與へ感じがよい。然し難解句の一つであらう。

(126)

うまい息子のあそふ朝日

東 魚 〓 「うまい息子」とは、「幸な身分の息子」の意であらうか。別けて誰も遊ぶ朝日ではあるが、尙更、人の羨望する程な、遊び様をしてゐるとも云ふのかと思ふ。

秋の屋 此の「朔日」といふのは、月々のでは無くて、吉原の八朔に相違ない。それでなければ息子の遊ぶ意が判明しない。

省二 八月の朔日は、朔日中の朔日ではある。「八月はひどい朝日十五日」―「うまい」は手腕のある、その道にたけたの意味になるかと思ふが。

(127) 天の川 淋しい 蛸に若旦那

省二 「七夕は土手から見える紋日なり」であるのに、この蚊帳こそ座敷牢だ。眠らむとすれば、却て眼が冴えて淋しい。

東魚 若旦那とやつた處が面白い。

秋の屋 これも「起きてみつ寝てみつ蛸の廣さ哉」である。

(128) 抱付て明るく成りし戀の闇

省二 明るくなつたのは、やはり電氣作用だ。此句註解せず觸れぬが可ならむか。野暮臭くならぬために。

東魚 先きが逃やうともせぬので、戀の闇に光明を認めたと云ふわけか。イヤ、説明は野暮ですか。

秋の屋 萬事解決、胸の火を點す必要も無からう。

(129) 桁丈の揃はぬ内か誠なり

省二 「誠」は眞純、邪氣無き事を意味しよう。桁丈け

の不揃なみなりは、可愛ゆらしいものである。

秋の屋 衣服を着ても、桁丈不揃の小兒のうちは、その心が純真だといふの歟。

東魚 小供は發育が盛であるから、常に衣服の桁丈が合はぬ勝ちとなると、考へる事も出来るが、この場合どうも充分でないと思ふ、兎角に不揃な、ちぐはぐな生活をしてゐるやうな中が、寧ろ誠が厚い。寸法の合つた充實した生活が出来るやうになると、兎角に誠が薄いものだといふ意ではなからうか。

(130) 引出の走り過たる噂言ひ

省二 引出しが走りすぎた場合に、世俗で何にか言ふ言葉があるのであるか。不知。

秋の屋 世間の人の噂を、抽斗の走り過るに譬へたものらしいが、其意がよく判らぬ。

東魚 「噂言ひ」と云ふのは、てには足らずで、動詞に用ひたのではなく、兎角人の噂をしたがる、金棒引手あひといふ名詞に用ひたものと思ふ。引出しが滑りすぎて、締めると又自動であくやうな、やゝもすると出しやばると云ふ、心持ちに用ひたものかと思ふ。

(131) いっ見た儘かけいせいの夢

省二 二様に解せられはせぬか。(一)心を入れ直した若旦那が、随分馴染むだ傾城の夢など、いつみた事であら

うと聊か感慨の態。(二)傾城自らが夢見ぬ事に解すれば、故郷の夢など、いつみた儘であらうか。

秋の屋 老人が過去を追憶するとも聴取れる。

東 魚 句面の工合からは、傾城その者が、夢みぬ方にとれる。傾城は夜の勤めのものであるから、本當にしみじみ夢をみて寝る間もあるまい。賣られてからは、夢らしい夢はみながらと云ふ同情の心持ちかと考へる。

(132) うき世繪書へ隣から膳

省 二 浮世繪師には時人もあつた。お隣から膳を運んで貰ふなど、生活振りが察せられて面白い。

秋の屋 妻子も無くして、獨身生活の畫工もあつたであらう。

東 魚 獨居して白晝も戸を鎖して、秘戯の圖のみ描いてゐたと云ふ人物もあるから、句のやうな場合も想像される。

(133) めくるあんくはのはい錢箱

省 二 收めたり出したりは錢箱の役目なのだが、惡因惡果で「廻る因果」といふから、この錢箱の中のおかねはオアシが早いわけがあるであらう。

秋の屋 此の錢箱は、何處のもので有る歟。賭博場のものとも解釋される。

東 魚 あくどい儲けた金は、又、忽ちに吐き出すやう

な事になると云ふ丈けだと思ふ。

(134) 妾の親の見飽く人蔘

省 二 珍重にすべき人蔘を、見あくといふ妾宅の贅澤振り。

秋の屋 遊里に娘の身を賣つた親より、最大幸福といへる。

東 魚 句面から、金權社會への憤りを、感じるやうに思ふ。面白い。

(135) 開帳に下る佛を小笹はら

省 二 開帳のため出張する道すがら、小笹原で一ト休みするのであらう。

秋の屋 「下る」は、都よりある地方へ、といふ意であらうが、開帳佛を小笹原で休ませるとは、其意が不明である
東 魚 小笹原が露しげく、清らかな感じがせられる。

(136) 鯉の罪は酔て顯はれ

省 二 鯉の腐敗氣味のをたべると、あてられて酔ふ。

魚毒消しに櫻の皮が効ありとして「あすきたらぶてと櫻の皮をなめ」「酒は梅魚は櫻で酔がさめ」「肴賣身に覺えあるくさめをし」「買人に藥を教へる鯉賣」。

秋の屋 罪ば鯉に無くて魚賣にある。

東 魚 酒に酔ふ場合とも取れると思ふ。鯉のおかげで一杯やりはやつたが、そも／＼間違のもとだつたと、云ふやうな事にも考へられる。

(137) 泣く子をは乳母に預けて立すかた

省 二 此句の場合「立姿」がいかに美しい、若い細君を想はせるに充分だ。

秋の屋 二「立姿」といふので、立派な大家の妻女が想像されて、面白い句である。

東 魚 美しい、自分の化粧にかまけてゐる、若い女房振りが想像される。

(138) とうらくて痒い所へ手が届き

省 二 善意に解すると、道を知つた上で、道を楽しむわけなので、世情には通じ、氣は利き、思ひやりもあり、且つ氣輕で、痒いところまでも手が届く。だから人好きがする。

秋の屋 道樂をした果、といふ意であらうが、其詞が少し足らぬと思ふ。

東 魚 道樂揚句でなしに、目下盛んにやつてゐる者としたら、「とうらくて」丈で、詞は足りやうと思ふが如何であらうか。

(139) うき秋をたき付て行く黒木うり

省 二「庵室の藥せんじる黒木賣」武・十一などの如く黒木賣が焚付けていつて呉れる。

秋の屋 黒木賣といふのは、その姿が閑寂であつて、華

麗なところが無い故、秋にふさはしいのである。

東 魚 黒木賣が賣つた木を、念頃ぶりに焚きつけて行くといふ點に、句の面白味がかかる。

(140) 鯛 ある日の空に知らる、

省 二 鯛雲と稱して、波型の雲が立つと、鯛が採れるといふ。「今夜出た雲があしたはぬたに成り」。「ひき續く海のきげんや鯛雲」(來道)。

秋の屋 鯛雲は鱗雲とも巻積雲ともいひて、天空にこの雲が顯はれると、鯛が多く漁獲されといふ。

東 魚 鱗雲の出た夕風の空が想はれる。「鯛ある日」とは、簡単にうまく言ひこなししたものと思ふ。

(141) 聲を立るといふか奥の手

省 二 聲をたてられては、男は身の置所に困る。女の奥の手は、さても容易な業である。「聲を立てやすき腰元いけぬけり」

秋の屋「生娘はとらへられると雉子の聲」といふ句が有つたと思ふ。

東 魚 女も仲々確かりしてゐる方である。ほんとの内氣な娘なら、聲も立て得ないかもしれぬ。

前號 (武玉川) 正誤表

姪子生

(頁) (段) (行) (誤) (正)

三〇 下 一七 澤山

三一 上 八 かいみ 深

同 同 一九 嫁は 娘

三二 同 二一 石澄籠 燈

暑・中・御・伺

大阪川柳會

大阪帝國大學醫學部內

大阪・三越川柳會

天守閣

大島濤明

大連市西公園町川柳居平洞
電話 自宅 三七一三番

橋本綠雨
橋本美奈子

大阪市住吉區平野西之町八三
電話 天王寺 一一六七番
振替 大阪 二九四五九番

暑・中・御・伺

米本貴志子

阿部閑生

豊中市千歳通二丁目

戸倉普天

兵庫縣川邊郡川西町鶴ノ莊

山本丹路

大阪市住吉區帝塚山中二ノ三八
電話 櫻川 五二四五番

福田山雨樓

勤務 東京鐵道省工務局人事
住所 横濱市保土ヶ谷三三三

西田艸樂

住所 大阪市東區元伊勢町昭和園
經營 日の出化學研究所

暑・中・御・伺

高橋 かほる 大阪市南區北炭屋町二〇一 電話 五九六番	カナメ 食堂 永田里 十九 大阪市南區疊屋町六番地 電 南 七 五 五 一	須崎 豆秋 大阪市住吉區旭町三ノ一四	不朽洞 會員 姫田 夕鐘 大正區小林町三六
妹尾 變人 大阪府泉北郡鳳町 北王子二二四ノ一	大西 八步 大阪市東區勞博町 一ノ一八(竹中方)	鳥生 古弗 廣島市白島東中町六三 藝備銀行寄宿舍内	石崎 柳石 今治市城山通 川柳みすか吟社
石田 沐天 大阪市西淀川區 海老江上三ノ五七	松島 みどり葉 石川縣河北郡津幡町加賀爪	高峰 柳兒 長野縣須坂町	大坂 形水 大阪府泉北郡 高石町南一〇九七

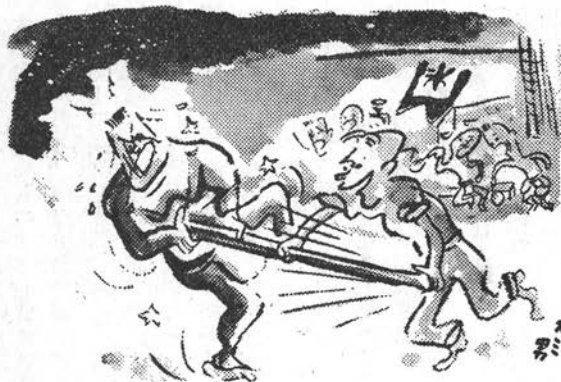
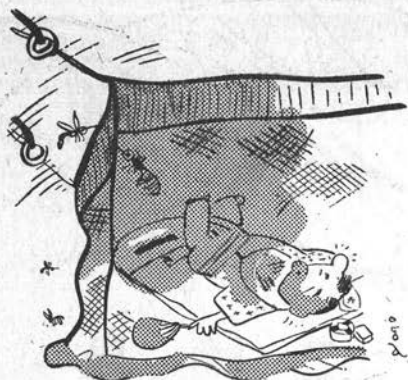
温又車ヤンシヨン

オサカ・マンガ・トリオ

小川武・甲貝スミ男・北幹夫

(一) 喰ひ過ぎ

蚊張の中の蚊「オイ、すまれえげど胃散かナンカもつけてきてくれよ」(武)



(二) 押しが強い

棒押の見物「おい、あの細いの人馬鹿に強いな……」
「ありや洗濯屋の外交だよ……」
(スミ男)



(三) 燈管はやり

納涼夜釣で「おつさん、すまんが燈火管制やつてんか……明るうて魚がよらんがな……」
(みき)



異國に住めば

大連 大島 濤明

◇密輸

大連附近で特に耳にする商賣に密輸業といふがある。山東方面で銀が安ければ、澤山の銀貨を身體に忍ばせて大連へ持ち歸へる。天津方面で銅が安ければ鑄潰ぶして密かに輸入するといふ最近では山東方面に於ける人絹や砂糖が高いので、こちらからドン／＼密輸出をやつてゐるそうである。

何しろ相手が支那だから、税關吏の買収でも、即座の贈賄でもわけなく出来るので、日本人でこの業に携はるものは相當の數に上つてゐる。

さもあらぬ顔で密輸は上陸し

◇飯進上

朝、晝、晩の飯時になると、支那人の子供や女が汚ないバスケットを持つて「飯進上！」と大きい聲で日本人の戸々を觸れ歩く。これは物賣りではな

く殘飯を貰いたいといふのである。

この物乞ひも次第に馴れると調子もよくなり聲もさびてくる。午睡醒めのぼんやりした頭で聽いてゐると、聲のいゝ女などの呼び聲は一つの音楽かのように感ずる場合がある。「あんな聲をしてゐて殘飯稼ぎに惜しいもんだ」なんて思つたりする。

飯進上聲のいゝのが呼び込まれ

布哇 高澤 一浪

◇裸體村

日本を喰詰た小生が二回目の祖國を「バイバイ」してからでさへ既に二十年になる。布哇にも珍風景がある。それは最近尖端的流行の裸體村だ。これは文字通り身に一糸を纏はざる男女が炎天の下大手を振つて逍遙するので實に天下の一大壯觀たるを失はない。勿論反射的神經を制止せざれば直に「ゲツトアウヘイア」である。

修養が大手を振らす裸體村

北支那

岩崎柳路

◇髭の無い閣下

北支及び内蒙國境視察に末次海軍大將が天津より飛行機で副官と共に去る五月十六日張家口へ安着された。中根領事以下官民合同でお迎へし、時局に關する訓話を拜聴、此の日は特に藝酌婦女給の参列が多く異彩を放ち此の様な奥地でさぞかし閣下も驚かれたであらう。

訓話があつて、野宴乾杯數刻にしてお別れした。吾々は異國に住めばこそ何等豫告も無く突然現海軍唯一の有名な末次閣下直前でお話を聞けた事を喜んでゐる。

髭の無い閣下へ藝者もの足らず

大連 高橋月南

◇酒と女になる彩票

大連は國際都市だけに却々面白い處

が多い。泥棒が盗んだ品物を公然と市場で賣つてゐる。一名ドロボーマーケットと言つて内地の觀光客を見物に案内する人もある。そうかと思ふと「タシナハン、オハイリ」と暗夜に袖曳く女は日本人かと思れば朝鮮のキーさんまがひ、一步路地に入れば脂粉の氣た

青島 正木琴舟

混血兒の苦力も交る港街

日・支・鮮・米人も睡る鴉片窟

ロシアバーのダンサー貴族の果と言ふ

どう支那妓も安價、紅い唇に青い酒を呑む白系露人のなれの果も見られないことはない。矢張り日本は一番ゑらい。次に一萬圓成金といふ滿洲國の彩票を一圓で買へる。毎月三十萬枚が飛んで賣れる豪勢さ、然し僅か一圓で一

萬圓の成金だから心臓が餘程強くなければ駄目だ。但し其の多くは酒になつたり女になつたりするから面白い。

撫順 日高阿喜良

◇滿鐵を米櫃

小生在滿二十有三年、郷里宮崎を飛出したのが十七歳、滿鐵に就職後兩親弟妹を呼寄せ弟妹を一本にし兩親を淨土に旅立せ、今は五人の子の父四人の叔父となり、滿鐵を米櫃にして暮す小生は郷里には村役場に戸籍を残すのみで何の慕ふべきものもなく、郷愁など更に感じない。でも日本人としての血は失せず、天皇陛下の有難さと國を愛するの念は忘れず、震源地滿洲に住む上は一朝有事の時、非軍人としての第一線に立つことは兼ねてから覺悟をして居る。

墓石を廻つる歸國の旅費を貯め



町・横・柳・川

煙草好きの路郎
が銀紙を寛め出し
た。銀紙を寛めて
飛行機を献納する
のかと思つたら、
川柳會館を建てて
んだそうだ。その
云ひ艸がよい。飛
行機なら俺が棄出
さずとも出来るが
川柳會館はそうは
いかぬと。

北國から釣嶺落しに六葉、文太、今雨の
三句集が出た。昨年大阪から「街の雑音」を
刊行した縁雨も北國の産である。北國人の
底力と思はされる。

谷孫六の招電で勇躍して東都に歸つた塚
越正光も職運が無く孫六の鬼籍入りで「財
の教」の椅子を自ら振棄て、再び大阪に姿
をあらはした。水府の廣告研究所の招聘す
るところと聞くが、水府がよく此の運命兒

川・柳・書・架(六七)

句集家

櫻井六葉著

▼本句集は梅鉢叢書第一輯として刊行
巻頭自序に代へて「父の死」の一文を
掲げて著者の川柳熱を表明してゐる。

▼巻末の「切援帳から」には川柳を挿
入した旅行記が掲載されてある。跋は
加能川柳社の關本一瓢君

▼昭和十二年六月二十日發行、四六版
洋裝函入。二一八頁。定價壹圓。發行所
金澤市博勞町二七(西田方)加能川柳社

霧の聲句集

松本文太著

▼本句集は軍配叢書第一編として刊行
を抱擁するかが疑問だと噂をそのまま。

外蒙古の入口、張家口にゐた柳路夫妻が
北支事變で避難する途中から寄越した電報
が、オオデホンドウリ三となつてゐたので
「肩書問合申遅延」で着信局から三日かか
つて配達された。玉出のゝが落ちれば玉出
だ。オオデをタマデと讀む位の推測は川柳

巻頭には麻生路郎氏安川久留美氏の序
と和田天民子氏の句が掲げられてある
▼句數約八百、巻中に上海事變從軍日
誌の抜萃文が配され「巻末小記」には
句集刊行の理由と云つた風のもの書
かれてある。

▼昭和十二年七月十五日發行。四六版
洋裝函入。一三七頁。定價壹圓。著作兼
發行者石川縣羽咋郡粟ノ保村字兵庫辰
一三ノ一番地松本武雄、發行所石川縣
羽咋郡羽咋町ア一三〇番地半島川柳社

今雨句集

越中今雨著

▼本句集は梅鉢叢書第二輯として編ま
れたもの、巻頭には窪田銀波樓氏、安
川久流美氏、櫻井六葉氏の序文がある
跋文は著者と關本一瓢氏。

家なら三分さかまるまい。

佐保蘭宛の通信が舞ひ戻つた。事務子の
手落ちで區を書き洩らしたのだ。なるほど
初音町は小石川區には限らぬ。下谷區にも
あるが、町名番地が詳しい以上、リレー式
に廻送すれば大阪まで突良さすとも本人の
手へは這入る筈。

暑中御見舞申上ます

庄萬よし

海水浴

西大阪から近い安い清潔な

阪堺濱寺

往復

大割引

（七月一日より）

芦原橋Ⅱ濱寺間 往復三十八錢

芦原橋Ⅱ大濱間 往復三十錢

小兒半額

主催 大 都 民 新 聞 社

取次店五十有余店

阪堺濱寺の海水浴が、近年陣容を整えて本年度に於ては飛び込み臺新設、餘興場相撲土俵、化粧室、喫茶店、寫眞部等の新設備は、正に海水浴場の模範的位置に相應して、西大阪百萬の市民に呼びかけてゐます。濱寺最北端の清潔第一の海水浴こそ大大阪市民の健康の源泉である。特約店へ、〔特約店希望の向はハガキにて通知を乞ふ〕

大阪市難波新地二番町二七

大阪都民新聞社事業部

電南五八八〇番

責任者 庄 健 一

ルービヒサア



大日本麦酒株式會社 達用御省內宮



塔柳川

本尊は女體で在す 掌を合し 山本 丹路

快よき感傷白き T O I L E T 同

幸福を築く夫婦とは見えず同

魂の創世記はこれからです
麻生 葭乃

小町草 袂の柄をぬけて來て 同

サンデー・晴・五女はバイブル持つて出る 同

地車に子を差上げて汗をかき
橋本 緑雨

日章旗一番高い山に立て同

憂鬱をよみがへらして酒に酔ひ同

白馬岳

頂上へやつとこさいに行つて來た 同

白馬温泉

上高地妻と來たこと思ひ出し 同

墓口の軽いと見たか念を押し 西田 艸樂

女一人劫を争ふ仕義となり 同

灯を消して月を覗かす麻蒲園 同

コンパクト金剛山の陽はなゝめ 同

夏枯に女房の髪を染めてやり 同

渡御が通るシャツでも引っかけよ 同

☆

自轉車で袂をながし女教員 姫田 夕鐘

田植が濟んで牛の馱きり同

大木の下でバリカンの父と子と 同

いきてる・しんでる・寫生の子の話 同

靈山のながれへ鮎の美しさ 同

惚れてから お茶屋の肥になりに行き 同

流行歌手パトロンを袖にする氣なり 同

パパにママベビーも漬物臭いなり 同

うるさ型敬遠されてものたらず 同

うたた寝へ影や日向の枝の風 同

妹尾 變人

なりゆきにまかせる心水を聞き 大西 八歩
 はるかなる思慕横顔を見てゐたり 同
 我家への歩調つまずく石もなし 同
 くつたくのひとみ時計をのぞきに來 同
 忍從の心淋しき風にふれ 同
 嬉曳の君も來てゐる 借家札 宮岡 白峯

路郎先生か見送りにて

一日を遊んでほしい氣で送り 同
 風鈴に風あり君の噂する 同
 寝轉べば元百姓の息使ひ 同
 齒のぬけた聲で拜んでゐる仲居 同
 棧橋を出ると樂隊はたとやみ 吉田 水車
 鐘一つ二つ琵琶湖を渡るなり 同
 神經痛ちと不似合な玉錦 同
 兩勇士神の御加護をおもふのみ 同
 懷ろ加減冷淡にされ 同
 出札の穴を覗いてこんにちは 須崎 豆秋
 始末書を書く袖口の汗 同

牛の鼻ひつばられてる暑さかな 同
 三びきになると蝶々も喧嘩する 同
 妓を横にふと女房の眼を思ひ 大鶴 喜由
 出征を送る長蛇の長柄橋 同
 千人針巡查やさしく道をあげ 同
 御用船さらば日本よ妻よ子よ 同
 見物の腹こしらへた驛の前 加藤ライト
 避暑地から歸り九月の陽が暑い 同
 煙草盆妻子の夢を破るまい 同
 遠慮して吞めばビールがお茶に似て 同
 同じ血の子が父親に反對し 朝田 新水
 明日と云ふ金の要る日をなやまされ 同
 顔拭いて朝の氣分の違ふ場所 同
 雨晴て幼き夢の橋に立ち 松下小柳子
 土曜日の歸る仕度が見ゆるビル 同
 ぶら／＼と涼み疲れてにぎりずし 同
 年寄の笑ひともない世辭を受け 西 いわを
 パーラーで二人は同じ氣持なり 同

置ざりにされてお茶菓子煙草あり

同

蔭口を云ふ昇給のスローぶり

鳥生 古弗

出張の話いつしかよこにそれ

同

一機二機日本晴れへ宙返り

同

☆

洋杖は下界々々と降りて行く

安川久留美

集金は勝手な理屈もつてゐる

同

君の相無帽の方がはるかよし

同

枕一つ抱へて涼風を探し

同

蝶とトンボ知らぬ顔してる

同

うしろから來て涼風も感謝せよ

同

煽風機今度お前の方へ向く

同

煽風機俺の嘘にかゝはらず

同

娘への手紙差出し「父」と書き

同

みな働いてゐる俺は水枕

同

一枚の雨戸へ彼女手をかける

同

貴婦人は泣く兒は生んでゐない筈

同

そよ風の中へ梅干あからさま

同

海岸でマイクロホンに立つ姿

同

子供等を笑はす事に腹が減る

池田 可宵

待人來るの花札はみんなうそ

同

物價騰貴一體誰れの儲けやら

同

おしぼりの中で眼をあぐいゝ氣持

長崎 柳秀

一息に猪口を乾す妓に眼がすはり

同

戀人に云ひそゝくれたまゝ別れ

同

沈黙の強さを妻の背に見る

同

兒の手前などときれいな格氣なり

同

折詰をほどいて今日の式の事

今川 椋影

近所の子今日は使ひの聲で来る

同

此次はゆつくり來ます靴をはき

同

斷りの返事はつきり嘘と知る

同

女濡れ行く雨垂れの窓を閉め

濱田久米雄

濡れてゐる魚籠が誰かに覗かれる

同

女事務花買ふ金を貸してやり

同

女には解らぬ良さと笑ひ合ひ

矢野虹の慶

カンカンの男綺麗な宵の街

同



(支部創立會記念撮影)

川維名古屋支部の創立

梅雨晴れの六月廿日夜長圓寺書院をうづめた來會者によつて川柳雜誌社名古屋支部創立記念會を開きこゝに名實共に支部の誕生を見たことはまことに感謝の至りであります。定刻先づ路郎主幹の講演に烈々火の如き意氣を示され、過去の事業現在の動向將來への抱負を明示された。席題、兼題、順次披露これに先き立ち各選者より祝詞激勵をいたいたのは感激に堪えなかつた斯くて意義ある集ひは無事終了。それより有志によつて路郎主幹歓迎の宴を廣小路タチ惣で催しこれ又多數參會を得て盛況裡に祝盃をおさめた。

此機會に支部創立に當り萬般の勞を惜しまれなかつた大窪文芳氏に深甚の謝意を表し、これに御賛同賜りし兼題選者諸氏ならびに當地柳界の諸先輩及び柳友各位に對し衷心より厚く御禮申上げる次第であります尙遠路御來援の路郎先生、白峯、ライト兩兄へ又左記の通り祝電祝吟激勵の辭を寄せられし諸氏に御芳志有難く御禮申上ます。柳友各位の御多幸を祈り將來益々御清援あらんことを希ひ上げます。

六、二二 水車記一

來會者、文芳、秀一、つれ子、鳳石、素老、素天、蕪人、千葉、呂香、元乃武、有町、あやめ、明央、蛤堂、一羊、三八朗、大八、滴水、鮮山、孝三郎、刀庵、文醉、清風子、さかゑ、明亭、七飯、東洋樓、のぼる、かづし、桃源、茶遊、勇四郎、正穂周鈴、周花、夢舟、霞亭、桂雨、旭映、路郎、白峯、ライトの諸君も水車

祝電

セイカイヲシユクシダイハツテンチノイノル(濁水) セイカイヲシクシヒロシマシヅ(廣島支部) セイカイヲシユクシ(山雨樓) セイカイヲシユクシ(鮎美) セイカイヲシユクシハツテンチノイノル(里十九) ゴセイクライナシユクシオオサカ(萬よし) ナゴヤシブノソウリツメタシガンバレオサカ(沐天)

祝吟

青風響ならべた頼母しき 松山 五健
名物は金饅こ並ぶ川柳 松山 大樓

祝詞

橋本綠雨氏、朝田新水氏、勝谷山川兒氏、山本葉光氏

繪提灯 白峯選

繪提灯團扇の風を送られて 勇四郎
夏虫を聴く椽側の繪提灯 同
水打つて涼しさ添へる繪提灯 素天
繪提灯奴豆腐の冷え加減 かつし
グット呑むビールへ搖れる繪提灯 ライト

アバトの窓に見えてる繪提灯
言ふ事もなくて嬉し繪提灯
ホテル今外資のある繪提灯
打水にすこしゆれてる繪提灯
繪提灯去年のまゐの釘にかけ
繪提灯何處か花火の音がする
繪提灯旦那の趣味に出来上り
繪提灯夕立になる風を受け
抱いた子もくれさ手を出す繪提灯
繪提灯花母の浴衣に見上げられ
夕立の行手見てゐる繪提灯
繪提灯かけて今年も皆達者
繪提灯妻の返事を聞きもらし
繪提灯團扇の風が届くなり
鈴虫も此處も買つてる繪提灯
抱き上げた子の手が届く繪提灯
(佳)生活の話を獨れぬ繪提灯
(同)多立へ涼しく揺れた繪提灯
(同)大阪の空をはるかに繪提灯
(同)店番に娘が出てる繪提灯
(同)囁きへまだ消え残る繪提灯
(同)言ひ切つた瞳にうつる繪提灯
同病床の子につけてやる繪提灯
(軸)電車道きつちりまげた繪提灯

トーキ― 七

群集の聲トーキ―へ物凄し
トーキ―へ女優少うし風邪をひき
窓へ寄り添ふてトーキ―聞く女
校庭でトーキ―も見る夏の宵

[illegible]

トキキ「娘のくちびるがかわいての
トキキの笑つただけはよく分り
(五客)
トキキ「時局の人の聲を知り
水だけを寫してトキキ泣いてゐる
トキキの甘える聲が大きく過ぎ
トキキは佳境臨官窓が、白い
トキキの日本の朝に鶏が鳴き
(人)トキキ「笑ひを追つて笑ふなり
(地)眠さうな音でトキキ二時を告げ
(天)校庭に寫すトキキ喇叭鳴る

評 判 鮮 山
不真面な子の評判を消すも母
評判へ廻り道する女連れ
評判の主は笑つて席に就き
うさぎ等どうでもいゝさつく立ち
寝不足が短氣にさせる流行謔
評判を外に男としての用
評判の店で落ちつて梯子酒
評判を對外的に考へる
評判の店をのぞけば客一人
からかわれる評判を聴いてくる
評判の薬へばらり名士の辭
評判の店で久しい友に遭ひ
味で賣る店で成る程量がなし
評判の美貌がたゝる不倅
評判がいゝとぞ肩をたゝる可
評判でしたか樂屋からもき
又葉山自分の手型おかしがり

白峯 三八期
のぼる 呂香
かづし 蛤堂
燕素 正秀
素天 穂一
選
三八期
のぼる 周鈴
さかえ 東素
素天 東洋
鳳石 鳳石
勇四郎 勇四郎
つれ子 東洋
東洋樓 東洋樓
燕人 燕人
明亭 明亭
のぼる 秀香
可香 可香
あやめ 蛤堂

道樂の果評判の上畑屋
綿花をつけた役者の前人氣
(五 姿)
評判のうなぎ屋へ来る宿浴衣
評判を恐れて寄附の名を匿し
指定席噂されてる二人居る
評判のスター指から草臥れる
評判を女中も膳の端で聽き
(人)評判を他所に女將のい、度胸
(地)殉職へもう銅像が立つ噂
(天)初舞臺娘の評判に汗をかき
(趣)評判の店はこれかと覗きに來
可
姿
婆公へ素直に仲びた姉妹
奉公の後ろ姿を母見つめ
見送りの母は姿の消えるまで
つけほくる生活に負けぬ姿なり
待ち呆けてゐる娘の姿振り向かれ
夏に捷つ 姿法被が汗に濡れ
姿見に未だするてゐる虚榮心
よく似てる後姿が走らせる
躍進の姿ハツキリ統計圖
名古屋城春の姿になつて雨
姿見を見て待合をそと出る
浴衣地に深水描く夏姿
まだ見ゆる姿へ別れ立ちつゝけ
化粧見しなを作つて女出る
同情の眼に賣られゆく娘の姿
姿見え女立つたりすつたり
姿見の前で奥様帯をしめ
亡父に似たりする姿へ立ちつくし
佳年頃を母親に似る歩き癖
同此まゝで行くと出かける梓天着

鮮かの素さ風つ清明刀白元清周の周東鳳正燕
づばかれ風の風ぼ洋
山しる老え石子亭庵武子鈴花棟石穂人

鮮素大明呂蛤えあ可
山老八亭香堂武め香

文三八
芳朗

(同)湯上りの姿へ届く虫の聲
(人)女形うしろ姿を大事がり
(地)見直せば母の姿の老けてゐる
(天)怒のない姿鼻毛を抜いてゐる
(軸)藤椅子に男氣輕ふ足を組み

千堂
蛤堂
三八朗
七八敵
可香

盛場

足に向くまい盛場の夜の景
盛場も巡查天職なればこそ
盛場の埃盛場の水を打つ
將來は盛場のなる青寫眞
盛場の雨は日覆の上へ落ち
盛場へ行く氣小僧の氣が揃ひ
盛場のこんな所に安宿屋
本降りとなつて盛場ざつと更け
盛場の裏捨犬が何か喰ひ
盛場へ相手もなしの旅籠
盛場へ又インチキを妻は買ひ
盛場の小路また悔いてる乳母車
駈落の盛場近く二階食し
盛場の裏が墓場の新開地
盛場に子の手親の手汗を知り
盛場を自轉車引いて鳴らして來
舊友に遭つて盛場二度あるき
盛場へ今も來てゐる小さな戀
さア雨だ盛場へ流し失の如し
盛場になじむ女の不倅
(人)盛場の小暗い所女ある
(地)盛場の裏道で待つ女
(天)盛場へつゞく夜店の端に生き
(軸)盛場の露路を覗けば撞球場

一の武
元の武
あやめ
七八敵
千葉
鮮山
三花
周八朗
孝三郎
刀庵
燕山人
同
素天
有町
あやめ
さかえ
蛤堂
孝三郎
東洋樓
元武
燕人
三八朗
のぼる

菰冠り

孝三郎選

祝典へごつかりこ來る菰冠り
菰冠り旗をこれて日本は強いさ
菰冠りの名前よく引き込まれ
菰冠りの合櫛を小さく見る
菰冠り明日開場の灯が灯り
號外と一緒に届く菰冠り
本店も支店も祝ふ菰冠り
萬歳が門で聞こえる菰冠り
新張り今日凱旋の街の色
値の順にすなり並べた菰冠り
大臣の私邸が狭い菰冠り
開店が明日に迫つた菰冠り
吉報と一緒にさぐり菰冠り
(五客)
菰冠り踏ん張つて抜く白い足袋
幔幕をしぼつて届く菰冠り
菰かぶり吾が世の春へ贈られる
菰冠り背の疊と白い足袋
菰冠り女將の指圖通り置き
(人)菰冠り笑顔ばかりに取巻かれ
(地)黨員をわつと言はせて菰冠り
(天)拜命の玄關となる菰冠り
(軸)菰冠りとな似合ひな縁は無し

つれ子
蛤堂
刀庵
ライイト
明亭
三八朗
呂香
可香
明亭
秀穂
正穂
白遊
茶遊
あやめ
鳳石
燕人
ライイト
茶遊
明亭
かづし
孝三郎
映選
旭
若葉
日魂の若葉へ一家皆揃ひ
忠魂の若葉の影がゆれてる
若葉の香しみと嗅ぐ病上り
初かつ若葉の風を添へて飲み
別荘の窓が若葉へ皆んな開き
展望臺若葉の杜に数えてみ
退院の寫眞若葉の丘に立ち

世の中の若葉も知らず探炭夫
甲羅千す龜に若葉の影がゆれ
新葉も若葉の中に聲がする
口笛で行けば若葉のプラタナス
公園の若葉に赤いポスト立つ
(人)一鉢の若葉樂しむ都會人
(地)引き伸す寫眞若葉が光てる
(天)街路樹の若葉へ都會住み慣れる
(軸)健康の我家若葉も伸びに伸び

印象
こんな夜の出來事だつた稲光り
第一印象を一言入れるメツセー
印象と別に白髪は見直され
大臣の辭を古本屋は話し
損をしてから印象が悪かつた
今日さほものにするぞさひげを刺り
貴族的無表情さがグツと來る
逃げて行つた妓の素足踵に來り
印象の中にはつきり白ズボン

路郎先生へ
印象を髪と眼鏡に發車ベル
印象派眉毛の先きわみな尖り
印象も深い名古屋の言葉尻り
初對面疊の敷を覚えて來
親切に教へてくれた京訛り
一人旅印象記な書いて寝る
(人)印象を忘れ様にも折かばん
(地)初對面相當飲けるなと思ひ
(天)子心に酒さいふ字の太い文字
(軸)印象が父に似てゐる人にされる
(同)よく値切る人と印象づけられる

素天
明亭
鮮山
七敵
燕人
素老
旭天
映天
有町
明鈴
周鈴
七敵
同敵
素天
可香
東洋樓
同香
蛤堂
霞亭
ライイト
三八朗
新水
正穂
呂香
同路
孝三郎

青空の下の會句

朝田新水記

お互の健康の爲めに青空の下の會が生れて三回目すつと幹事を仰せつかつて、責任



感を重んじ乍ら定期的に集合場所へ行つて見るといつも十人も足らぬ人数、すつかり幹事さいふ名目も忘れてしまふどころか、作句すること迄忘れる程ののんきな會である。今日も住吉反橋前集合さいふから、嬉鬼に好い場所やなど、そんなことばかりがぼんやり頭に映じてくる。大鳥居からの敷石、反橋の袂に早くも主幹の令息のかけくらべをする姿が見えた。右手の繪馬堂には退屈もなく、奉納繪馬に眼を通して居られる路郎師、何々屋何右衛門なんて古い家號にまで、興味を持たれてゐたやがて縁雨氏の一家の顔も見えて、反橋を渡る元氣もなく右折して住吉大社へ参拜する橋の木陰に女の大道易者の鳥帽子をいたゞく異様な姿、一行中の路郎師令嬢純子さんに

縁談でも見ましようかとなか／＼抜け目が無い。住吉公園の濃い眞青な空が唸るやうな光の中から現はれ、とんぼの幾群か、眞黒な羽をきらつかせてゐる等、昔の茶店は跡としかたもなく、よく手入が行はれてゐる。高燈籠も街の眞中にそびえ立つアロテスクさ、かつかたと照りつける太陽の下に熱い埃を湛へた住之江公園までの道を一臺のバスが、女運轉手に依つて往復して居るが、木津川尻の空は煤煙に包まれ、飛行機すらも影を没してしまひ、又此の邊の櫻樹までも枯らしてゐる。公園にはモダンな橋が掛けられ大阪人の理想に叶ふ様にしてあるが、足場の遠いだけが疵である。池には辛氣臭くも太公望の釣竿を垂れてゐる姿が、一列に並んでゐる。かと思ふと、野球に



プールに、一日を楽しむ公園の人々と、同じ一日を楽しむ我等を想ひ出させるのである。晝時に日曜の紋目を控へた森永食堂で待たされる間、住吉みやげの芋籠に添へてある説明書を路郎師が讀まれた。實に名文である。一笑の内に各自の好きな物を食べ涼味滴る青葉の蔭で、散會した。(七月十一日住之江公園にて)(寫眞説明)「上」住之江寄波橋にて路郎、縁雨、美奈子、靜江、純子、一步、「下」臨南寺にて(前號参照)縁雨、八歩路郎、葎乃、艸樂(新水撮影)

★柳人素描

(三) 酒井大樓君

伊豫電鐵の名驛長だった酒井大樓君は数年前、二十六年も奉職してゐた伊豫電



鐵をアツ
サリ退却
して後身
に道を譲
つた。今
では職業も
なければ
勿論勤務
先もない、
電話もな
ければ別
號もなし、
あるのは
終身恩給
といふ結
構な身の上。
園芸、旅行、登山、宗教の研究、
川柳の世話役で終始しハンド・ツ・マウ
スの人達の羨望の的となつてゐる。
君は大正八年、故自笑子門下として柳
界に入つた。

今日一歩今日の心で明日一歩
期かに成れよ草の芽に木の芽
などに君の句境が窺えるであらう。本名
は公(たかし)松山市在住。愛媛縣西宇
和郡宮内村が、その出生地である。伊豫
新報川柳欄を擔當し名選者として知られ

川・協の仕事はエスカレーターの下
うに撓みなく前進を續けて居るので御
安心の上、氣長かに御支援願ひたい。
大分基礎工事がすすんで來たのも、柳界
の將來を深思されてゐる諸君の御後援
の賜ださ感激してゐる。 川柳人協會

☆

▼北京から特急で八時間もかかる奥地
の張家口で、活躍をつづけてゐた岩崎
柳路夫妻の身邊を、北支事變勃發と同
時に氣遣つてゐたが手紙も電報も行か
なくなつてしまつて策の施しやうがな
い。毎日新聞を眺めては、早く逃げて
呉ればいゝと念じてゐたところ、な
んと讀んでいゝやらわからぬ發信地で
「イマヒナンスルアンシンセヨイワ」
といふ電報をうけたが、これまた片だ
よりで、こちらからは何んにも答へや
うがない。何處へ避難したのかそれす
ら判らないが、勇敢な柳路夫妻だから
眞逆間違ひはあるまいと少しは心を落
ちつけた。電報は十五日に出したらし

いが十七日着信、住所の誤字から私の
手に這入つたのは二十一日だった。二
十四日にも着電があつて凌源に逃げた
ことを知つて漸く安堵の胸を撫でた。
同君以外にも、天津には和田默然人君
がゐるし、各地の様子は知りたかつた
が、手の痛んで手紙の書けないのが何
よりの苦痛だった。大連が燈下管制を
やつたころはまだ筆がとれたので早速
大島瀧明君に見舞狀を出して彼の地の
狀況を知ることが出來た。大連は十六
日迄、丸五日間燈下管制で眞ッ闇だつ
たとのこと。しかし何等被害がなかつ
たのは何よりである。

▼川柳翻譯研究會創立記念句會は七月
十四日夕神田一ツ橋如水會館に於て開
催され、宮森麻太郎教授の講演があつ
た。

▼川柳同人社(京都)では八月十六日
をもつて一周年を迎へられたがその記
念句會は菊の佳節十一月三日を期して
舉行される由。

てゐる。川柳雜誌社松山支部幹事、川柳人協會理事。

(四) 富士野鞍馬君

富士野鞍馬君は東都にあつて久良伎君に師事し、日本精神を遵奉。好きな女は



「日本髪で所謂別嬪でなくとも愛嬌のあるハツキリとした中長顔、どこかに粹なところのある地味廻り、舞踊の心得のある身体、のこなし、肥らずして脊の高い方、体重十二貫五百、身長五尺、足九文三分さいふとこでせう」と。流石に「松竹梅」の東京探題であり、君の郷國が京都市上京であることを思はされる。君の句作は正五年からはじまる。

馬場先を歩む日本の心持
名取の妓さす指環をぬいて立ち
に君の句風神髄と云つたものを見る。しかも作る以外に理窟を云はない。趣味としては書道、自流畫、小唱にあそび一家をなすに足るときき。君は東京市杉並區高圓寺に住し、本名を安之助、別號を壽洛莊、正親町江戸磨と云ふ。名譽職として東京洋酒聯盟幹事長、陪審員候補者川柳關係では川柳久良伎社同人、番傘川柳社社同人、川柳人協會正會員。著書には「川柳鞍馬集」「江戸磨隨筆集」がある。

▲川柳すげ笠會(愛知)では川柳普及發展のため七月廿日から三日間川柳趣味展を大山局前小川景山氏宅で開催された。

▼白木屋(東京)主催の白木觀音四萬六千日に恒例の獻燈絹行燈に柳人の自畫五基(玉兎朗、雀郎、壽山、久良伎鞍馬の諸君の作品)を七月一日から掲げ大衆に呼びかけた。

▼半島川柳社(石川)主催北國新聞社後援の近縣川柳大會は八月一日午後一時から羽咋町元郡役所階上で開催され金澤から窪田銀波樓、安川久留美君等の應援をうける由。

☆

▲本田溪花坊君は七月三十一日限り川協名譽會員を辭退された。

▼八月一日以降川協の名譽會員は左の二十三君で今後の柳界の發展と向上に盡瘁されることゝなつた。なほ近く新名譽會員が發表される筈。

蛭子省二(朝鮮)榎田珍竹林(静岡)
藤本福造(京都)堀口地人(同)池田可

宵 朝鮮)伊志田孝三郎(名古屋)龜井
晟修(函館)川上三太郎(東京)小林不
浪人(青森)前田五健(松山)前田雀郎
(東京)森東魚(豊中)村田周魚(東京)
中島紫痴郎(長野)中澤濁水(高知)大
島濤明(大連)大谷五花村(東京)齋藤
旭映(名古屋)坂井久良伎(千葉)根本
紋太(神戸)塚越正光(大阪)和田天民
子(東京)安川久留美(金澤)

—ABC順・敬稱略—

▼最近の「三味線草」で川・協の名譽會員に期限があるのを難じてゐるが、川・協の名譽會員は偶像ではない筈だ過去の功績の表彰と同意語にも等しい世の常の名譽會員とは譯が違ふ。川・協の仕事は偶像を奉戴して出来る仕事と仕事は違ふ。尠くとも將來の川柳界を深思する人々、その向上と發展に熾烈なる熱意と不斷の實踐を期待する人々に捧げた尊稱なのである。全然起つ能はざるを知つた人々、柳界に害毒を流す人々は自らその期限の到るをまつて後退さるるに便であり、後退を勧む

(五) 姫田夕鐘君

姫田夕鐘君本名は要、徳島の産。大阪で丁稚生活からたたきあげ、今日の化粧品



のもうなづける。小柄だがガツシリしてゐる。句は昭和三年の正月、鮎美君から指導されたのだと聞く。

新妻のうしろ姿も俺のもの
は数年前に君が心境を詠つた句。風水害の時、二階に近く水が押し寄せ商品をつげながら頭張つた。そして水は減る／＼怒を取り戻しといふ句を吐いた。趣味として古くから劇を愛好。川柳雑誌社不朽洞會員。川柳人協會評議員。

正 誤

前號本欄發表久留美君の句は二句共同君の句でないとの通知に接したので、取調べたところ久米雄君の句であることが判明した。編輯上の手落ちをお詫びし左に改めて久留美君の二句を發表する。
半巾が重く干される萩の花
垣も鍵もなく水の上水流れ

るに穩健でもあるからである。しかしながら協會側よりこれをなすことは協會の目的に違背せる行動をされざる限り殆んど稀有であることを申上げて置きたい。本會の如きは一つに協力によりてはじめてこれが貫徹し得られるものであるから役員制度の生きて働く手段に出たのに外ならぬ。

▼川・協の役員には游泳術の巧い朝三暮四の人々は必要ではない。地味で堅實で、實行力があつて、川柳愛の熾烈な人々でさへあればいい。さうした意味で役員の詮衡を無闇に急がないのである。

▼川・協の仕事は遅かれ早かれ誰か、是非とも斷行しなければならぬことを川協の眞の理解者は知りすぎてゐるので、川・協への應援を惜しまれぬのである。自己本位の感情問題から、ひそかに反川・協の意思表示や防害をしたところで理解者の矢面てには齒が立たない。今からでも遅くはない反省すべきであらう。

▼川・協ではサービス部を設置して川協會員の上阪に便するため簡単な宿泊を意味するものを計劃してゐる。又大阪案内、ホテル案内に就いても考慮中である。

▼「柳人素描」は川・協名譽會員に限らず理事、評議員、正會員に至るまで全部掲載の豫定である。自他の事に限らず、よき材料をお持合はせの方は内報を乞ふ。

暑 中 御 伺

炎暑を征服するに
は心身を鍛練する
に限りませう。
句作の三昧境に遊
ばれ忘暑の域に達
せられんことを切
望いたします。

川柳人協會

▼川・協入會申込書のついた入會案内が出来たので御希望の方は申越された
い。

申込所 大阪市西成區玉出本通三の
三六 川柳人協會

暑・中・御・伺

流れ去る別離の水が光りつゝ 雨迷

常任監査役 山本 彌一郎

大阪市東淀川區中津濱通一
電話 北三八〇五

モーターのひびきになれて雲の峰 一步

専務取締役 鳥山 隆夫

大阪市東淀川區國次町二九七

鐘紡、東紡、三菱その他各大紡績會社御指定品製作

株式會社 合成化學工業所

本社 大阪市東淀川區長柄中通二丁目一〇番地
電話 堀川(35) 一二八七番



一路集

募集句

海

大島濤明選

郷愁の影が動かぬ海の午後
漫談家海を歩ける 理窟云ひ
逢ふてゐる夜傳説の海が鳴り
あこがれの海怖しい荒を見せ
海の色 肌の色夏の 太陽だ
本心を聞かす海邊に月が照り
ハイキング額の汗へ海が見え
沖と丘とどかぬ聲に手をあて
海は呼ぶ鐵道省は 儲けてゐ
船一つボツンと浮ぶ丈けの海
大洋の廣さが欲しい稠密量
海近く上手になゝハーモニカ
世界地圖 太平洋の廣さ知る
ドライブウェー松原さへ海の青
夏 海戀を拾へば日に焼ける
あか／＼と朝の日を吐海の果

都之介 石 艸 朔 風 春 帆 子 水 客 岩 石 龍 城 由 布 春 集 紫 香 五 鼠 子 香 林 坊 ライト 海 棠 明 珠 菊 路

海に來てチロツト浮氣が顔を出し
海一つ向ふの國の破壊主義
海超える事なく母の幸つづく
島影も見えぬ廣さの渡り鳥
海女からの話海 底怖くなし
大海へ日本男子のゆくところ
浅き海女子供が踏み躪り
海へ來て女伸びく砂に伏す
水平線へ許嫁とふたりきり
畫の海くらげの姿俺に似て
海に浮くヨットへ派手な海水着
夕焼へ海の神秘は暮れてゆき
船艙から海の底聞く脉の數
海難は全損で鳧がつき
戀人の髪を毛へ吹く海の風
海をさそ借の事など忘れたり

準 人 沐 天 葉 光 夕 鐘 浪 二 同 文 庫 同 鮎 美 同 斗 風 同 流 葉 同 曉 童 同

荒るゝ海寝て讀む本に親しめ
波の音ばかり聞こゆる同性愛
人靈を飯んで靜かな海の色
一夏を此海岸で戀もなし
海に來て心を廣く持ち替へる
濱すたひキレイになつた足の裏
こんど來る波へ女は一寸逃げ
棧橋の眞下こわく海を見る
初日の出意識はつきり海の國
ある時は怒り日本を護る海
西行が居さうな濱に乞食ゐる
浦島に變らぬものは海の色
二人來て波も嬉しい砂に居る
日本海此所らで日本勝つた跡
海トロリ澄んで小舟の戻る音

五 客

新 水 同 幹 同 ぎ 同 南 濃 路 同 同 三 巴 同 同 浮 草 同 同 同 岩 石 水 客 夕 鐘 龍 城 明 珠 砂 遊 び 太 平 洋 の 端 の 端 都 之 介

會 計

橋 本 綠 雨 選

地 位

天 位

白滅へのゴールとなり海の色

朔 風

奔流の海にはいれば静なり

五 扇 子

文具屋をまた叱つてゐる會計課

三 巴

壹圓の違算會計燈がともり

同

會計を一人のしやデツカンシヨ

都之介

會計が濟み二次會の先に立ち

同

會計はもうこれでよい酒に

曉 童

會計のある日自分をおそれたり

同

まだ大丈夫かと會計へこくる

美知夫

顔ぶれを見て會計は案じ出し

同

佳 吟

切りつめた心會計ばかりやり

新 水

會計の若さ誘惑しりぞける

五 扇 子

會計があたり嚴しい席につき

都之介

會計を呼んで景氣の好い話

葉 光

會計は無駄口もなく判をつき

流 葉

人

怒つてゐる様に會計金を出し

沐 天

母親は會計といふ身を案じ

香林坊

方言になれて會計親しまれ

水 客

地

會計課そば食ふこと氣が揃ひ

三 巴

會計のつらさ素面のまゝで

ラ イ ト

天

會計の壁に曲つた影法師

鮎 美

見所があり會計をまかされる
會計は金が餘つても心配し
會計が優柔不斷見えてよし
會計の時間ぎり／＼やつてゐる
一枚の無駄を會計見逃せず
會計へその人格を認められ
顔色も變へず會計席にゐる
會計は他人の金で苦勞をし
會計は俺がするよといふ氣嫌
何につけ會計の愚痴を聞き
きつちりと合つた終る紙幣の音
紙幣束を渡す會計印を捺し
會計へ説き伏せに來る姉藝者
これしきの會計で手間がとれ
會計のドア嬉しい顔で出る
會計の男を仲居招き出し
任かされてゐる會計が値切り
會計の帳簿パチンと閉ぢらる

海 棠
ざ ん
南 濃 路
水 客
幹 草
浮 草
岩 石
石 艸
和 夫
新 水
由 布
鮎 美
香林坊
朔 風
浪 二
春 巢
葉 光
明 珠

會計簿少し残つた給料日
會計があはぬと妻をよめて居る
會計は知つてゐるが高を聞き
黙々と居て會計の二十年
會計に使ふてならぬ金があり
月末の日曜會計は休まれず
會計に推されていざども云へず
會計の表情もなく札をよみ
會計にまかしきつてゐるさき
六進が一十で割前を集めに來
會計の顔で二次會三次會
幹事室會計大きな顔になり
會計は雜費の高を咎められ
會計は一番後で汽車に乗り
會計は消極的な案を出し
これしきの金を會計二度敷へ
會計は何と云つても出さぬ
むつかしい顔に會計一寸怖え

禿 光
南 天
流 葉
沐 天
菊 路
斗 風
榮 同
夕 鐘
白 峯
同 馬
木 馬
同 庫
文 庫
同 庫
春 帆 子
同 庫

各地柳壇

いのちある句を創れ

投稿規

- 一、用紙は原稿用紙又は投句箋の事
- 二、文字を正確明瞭に記載のこと
- 三、開催月日及場所記入のこと
- 四、締切は毎月廿五日とす
- 五、投稿先は本社宛

七月本社例會

七月七日

於 誓得寺

兼題 他國路郎選 寢臺(艸樂選)
席題 食慾(互選) 荷車(久留美選) 雷

(かほる選) 柳(沐天選) 翼(東魚選)

汽車の窓他國へはいる夢の色 東魚
五人とも一人前にしてかへり イクエ
他國へ來ても狭う生きてる 沐天
泣げばたる他國同志のくちびるよ 白峯
國を賣つた同志がこゝでうまが合ひ艸樂
鍋鏝かけ國の訛りが取りきれず 久留美
宿の酒他國の風を忘れさせ 八歩

うらぶれて他國の膳へ小さうゐる
他國さは云ひでふ妻の里で死に
涙ぐむ 辭が他國の椽の端
賣られ來て他國の春に生きんさす
寢臺車 向ふの客の顔に倦き
寢臺車 故郷へ急ぐ音をきき
寝掛けた 寢臺ひよいと猫が下り
神様と醫者にまかせたベットなり
寢臺に眞の我を投げかける
寢臺へ押かけられて時の人
ベットもう明日を信じて眼をつむり
裸體畫の下のベットへ落ちつかず
神経がみだりにさがる 寢臺車
白峯

療養のベットへ君も貴女も來
食慾の後に運動する子供
七月の食慾冷えた茶で流し
食慾はビール数本ブラリと出
朝飯がうまい且そのやかましき
食慾は進まず蠅を殺してゐる
食慾が有るの無いの飲みつづけ
荷車を押してやらうかやるまいか
荷車を押す程女房世間なれ
荷車へ晩酌の事かんがへる
木の蔭へ荷車をつける冷し飴
引越しの自分で曳くは二階なり
荷車の汗へいきなり値切られる
荷車をひいて現在過去未來
荷車の位置ついで 助手は下り
荷車の下に辨當ぶらさがり
荷車の汗ばつたりさ落ちて夏
荷車の汗ばつたりさ落ちて夏
轉宅の車へ秋の風があり
荷車を横づけにしてうれしい日
道をきくなら荷車押してゐる
荷車はよう／＼木影みつけたり
荷車でグッスリ寝てる夜店の子
荷車を又も追ひ越すハイキング
雷をお寺の軒で聞いてゐる
留守守る妻へ雷近ふ鳴り
遠雷に海水浴はあわて出し
雷に追ひかけられた汗をふき
ちうづりの雷雲と共に降り
遠雷と別にでん／＼虫の角
同 謙南坊
艸樂
沐天
東魚
白峯
變人
同
王京子
同
白峯
同
久留美
八歩
東魚
艸樂
小柳子
里十九
和夫
王京子
小柳子
八歩
王京子
和夫
久留美

交番所眞赤なダリヤ淋しそう
交番所 髪を生やしたのに變り
昇 玉
久米雄

川・雜
梅田支部
六甲有馬越吟行

六月十三日

水谷鮎美報

いゝ景色小學校が見へてゐる
指をさす方に街道白く見へ
踊る兒

流行歌唄ひ山越へ溪を越へ
同 同

初夏の陽をまさにもうけた上り阪つてき生
同 同

晝めしるときをライカにおさめたり
同 同

瀧白く涼し河鹿もないてゐる
同 同

陽のながの千年家に山近し
同 同

岩清水顔をうつしてのみながら
同 同

湯の街の骨葉に僕も歩いてる
同 同

驚をきいながら有馬へ下りる
同 同

夕闇に藝者の顔が白ろうき
同 同

川・雜
梅田支部
川柳風呂(續その二)

君さ僕

水谷鮎美報

それからわからぬ君さ僕の酒
朔 風

祝杯のジョウツキにうつる君と僕
同 同

見解の相違に遠い君と僕
同 同

自動車にゆれてる君さ僕との夜
同 同

私生兒の君さ僕との社會觀
同 同

手を取つて共に泣けるも君と僕
同 同

金借るに君さ僕さの印が要り
冬 扇

戀を知つてる君さ僕さの口笛よ
同 同

君と僕かるく見られた蒸タオル
同 同

目配せをして君さ僕先に立ち
同 同

強情を張つてもみない君さ僕
同 同

まごころの君さ僕さの腕なくみ
同 同

川・雜
梅田支部
新築地劇團觀劇句會

於朝日會館 七月十日夕 水谷鮎美報

女人哀詞(四幕)

鳥追ひのお吉へ柳芽をふいてつづき生
同 同

松の風ばかりお吉に答ゆなり
同 同

三味線のお吉へきんの泪あめ
同 同

ランプの灯お吉につらいことばかり
同 同

川柳
梅田支部句會(大阪)

かほる賞(北風・丸藥・剃刀・美人)

北風の街車屋に道をきき
遊 歩

北風に行季一つの娘さ出會ひ
由 布

北風へ草が生へてる埋立地
同 同

色街を抜けて丸藥買ひに行き
冬 扇

丸藥へ白湯のほしい獨り者
朔 風

胃に効くさいふ丸藥の苦いこと
由 布

剃刀を砥ぐ傍井戸の水を汲み
同 同

手のさいくさこへ剃刀置き忘れ
同 同

剃刀を疊においてた女同志
同 同

近道の一人美人さすれちがび
同 同

元町を歩む美人のすそさげき
夕 人

きつちりと美人のはいた白い足袋
由 布

川・雜
梅田支部
武田尾吟行

五月十三日夕

水谷鮎美報

新緑、仲よし

病つきてまた新緑の候さなり
大 嶽

鮎はさむ箸へ緑の風うごき
由 布

新緑のどこかで水の音がする
同 同

新緑がお針の部屋に映へてゐる
同 同

新緑の宿にさまれば豆御飯
冬 扇

新緑の瀧の裏なる不動さま
同 同

グリーンカーバー新緑をゆるがしめ
同 同

新緑を訪へば木魚の音がして
同 同

わさこも馬が好きだんねさ女同志
由 布

湯上りを着て盃さ仲のよき
冬 扇

仲よしへつけて煙草の灰がちり
朔 風

仲よしのふつと沈んだバーの隅
斗 風

仲よしの友呼ぶ聲のこだまして
同 同

友情の世界にたつた二人きり
同 同

仲よしの眼鏡をはすす物語り
同 同

仲よしの繪羽織でゆく同じ紋
同 同

仲よしと来て武田尾の湯にしたり
同 同

川柳
梅田支部句會(大阪)

林 朔 風 報

ひび、三代目、空想
同 同

ひびの手で桃割を結ぶ弟子をほめ
同 同

賣れゆきはよし看板は三代目
同 同

空想の雲がきれいな開拓地
同 同

三代目子のない事をさびしがり
同 同

空想が父の意見さそむく夜
同 同

空想へ雲が綺麗な夕まぐれ
同 同

空想のこんなところにつくづくし
同 同

空想の日向に居れば風邪を引き
同 同

三代目店洋館に改造し
同 同

空想の寢床をろげんはぢくなり
同 同

川柳社誌
鶴町支部會

六月十一日後六時

宮岡白峯報

憧れの大大阪で、肥がきれ
 三代目 塀のうちらの 八重 櫻
 三代目 邪教に凝つてやもめてゐる
 三代目 繼ぐ一人子 の病みつづけ
 空想の 壁に 下つた夜 の蜘蛛
 好色も受け繼ぎ無事な三代目
 空想の たばこの 煙へ 春の 雲
 奥さんの 腓に 大根つまゝ 入れる
 家賣つて 行方 知れぬ三代目
 手の 腓をみつめ故郷へ手紙 書く
 三代目 破産する日 の秋の 空
 邸 賣る 話三代目 膝に 居り
 空想の中にながつた車ひき
 惑星さいふ腕のある三代目
 五十年まだ空想へ遠くゐる

同 朔 同 徹 同 大 同 由 同 斗 同 同 冬 同 翠
 風 郎 嶽 布 風 扇 陽

雨暗れて嬉しい背廣服で出る
白峯
風爽さ村へ背廣を着て歸り
よしみ
失戀を包む背廣の派手な柄
變人
背廣着て今日は何事になつてゐる
同
背廣着て一人前に扱はれ
よしみ
おみくじの凶へ一層迷ひこみ
白峯
迷ひ子へ巡查は丸い／＼腰
ライト
キツチリで當り迷信さも云へず
同
ロックで迷ふ心を見すかされ
岩
食慾がなくてメニューへ迷ふなり
岩
迷ひ子のためニ淋し女文字
石
云ひ譯の言葉に迷ふ朝となり
岩
郊外に住んで健康ほめちぎり
南
恩給で暮らす郊外うらやまれ
小柳
郊外の朝を電車の中で見る
岩
煙草屋をあてに郊外探して來
石
郊外に神經質を捨て給へ
變人
賣出しの文字は郊外住宅地
千兩
郊外へ出るさ電車は走りだし
よしみ
郊外の空の青さ／＼寝ころんで
變人
子澤山戸籍係の眼さ出合ひ
ライト
仕送りに楽しく生きる子澤山
よしみ
病んでゐる父へ静かな子澤山
小柳
子澤山兄は丁寧にやるさ決め
寛
子澤山どうか皆んな生きてゐる
よしみ

阪大川柳會六月例會
(大阪)

丸島利生報

猿又、唧筒、鳥、雑吟
お隣の唧筒が起きて夜が明ける 芳一

[illegible]

暑・中・御・伺

川柳雜誌今社治支部

渡 長 在 石 石 谷 月
 邊 野 間 手 手 原
 今 今 今 今 今 今
 治 治 治 治 治 治
 市 市 市 市 市 市
 文 文 文 文 文 文
 明 明 明 明 明 明
 寺 寺 寺 寺 寺 寺
 庫 庫 庫 庫 庫 庫
 町 町 町 町 町 町
 童 童 童 童 童 童

川柳雜誌御池橋支部

村 後 西
 松 藤 藤
 夢 青 青
 裡 兒 兒

大阪市東成區南生野町二ノ六二

大阪市東成區生野ヶ丘

大阪市住吉區住吉町一七二七

川柳雜誌今社鶴町支部 (順ハロイ)

岩 西 中 上 小 照 淺 宮 宮 妹
 橋 藤 山 下 西 星 岡 岡 尾
 端 見 藤 山 下 西 星 岡 岡 尾
 謙 小 小 小 小 小 小 小 小 小
 岩 南 光 仁 柳 仁 柳 仁 柳 仁
 石 天 路 子 翁 柳 公 峯 子 人

川柳雜誌今社梅田支部

松 飯 武 天 山 都 橫 皆 仙 薦 辻 川
 枝 野 田 野 下 藤 田 見 波 野 遊 村
 靜 健 安 卜 秀 古 方 一 夕 雨 觀
 波 坊 雄 居 峰 木 眠 男 人 聲 月
 宮 橫 宮 岸 中 行 幹 酒 田 增 林 水
 本 町 脇 美 方 辻 事 井 邊 元 朔 谷
 あ 周 大 基 徹 冬 斗 由 鵜 鵜
 き 三 嶽 男 朗 扇 風 布 陽 風 美

暑・中・御・伺

張家口と云ふ處は北京より特急で八時間餘りの奥地海拔千數百尺の高地で外蒙古の入口です。這麼な山間僻地で北支の情勢を見、緩速の雲行きを案じつゝ家業に勤しんでゐます。特にお知らせ致す事は蒙古人の親日振りであります。そして吾々同胞は日章旗が奥へくと樹てられて行く〇〇工作を力強く感じてゐます。祖國の柳友諸賢、益々御健康で斯道に御精進される様御祈り致します

岩崎氏夫妻は北支事變のため目下熱河省陵源に無事避難する
(編輯局)

北支那張家口東安大街十七號
カフエーオペラ

岩崎 松柳 代路

電話二三五番・二二七番

田中五扇子

大阪市此花區西九條上通
一丁目六十五番地

弘津慶一

朝鮮全北金堤本町

古寺謙南坊

大阪市北區黒崎町一九

原美靜流

現住所 岡山縣阿哲郡上市村大字
井村足立三八〇四
勤務先 伯備石灰會社石工事務所

岡田浮草

愛媛縣越智郡菊間町

藤堂卓

大阪日本橋南詰南
公立書店



柳界展望

全國川柳界のこころ、各地川柳家の一舉手一投足をこの展望欄で、すぐわかる様にしたい。皆様の御通信を歓迎する。

催

▲本社七月例会は七日夜警得寺に於て開催、金澤より安川久留美氏「何さなく汽車に乗りたく思ひしのみ」の氣に煽られ、突然、會場へ姿を現はされた。路郎師の「柳味の多角形」の講演の後、久留美氏の講演あり作句者に對して作句の上に思ひやりある觀察を希望された。閉會後有志者集つて久留美氏をとりまき竹葉亭に於て快談した。

▲本社名古屋支部の七月例会は廿日長圓寺に於て開催、酷暑に

めげず、多數柳人の参加あり名古屋柳人の熱おして知るべしである。

▲川柳氷原社（小樽）では復活一周年記念誌上句會を催されることになった。「氷」「原」各三句締切八月十五日小樽市花園町田中尚子方同社宛。

▲春柳吟社（大連）の七月例会は六日開催なつかしい數々の柳人から寄書を頂いた。

▲むさしの川柳會（東京）の納涼句會は八月六日夕高圓寺寺町會館樓上に於て開催される由。

▲本社塗骨支部の例会を六月廿日淺謙公君の宅で開催された由

▲阪大川柳會（大阪）七月例会は二十三日夕路郎師を迎えて開催された。

▲本社廣島支部の七月例会は二十三日開催されたが盛會だつた由。

▲本社骨空の下句會は七月十一日開催（世七頁参照）

創刊

▲後藤紫光君發行による柳誌「フアーストライン」が愛知縣中島郡奥町同社から發刊された。御發展を祈る。

▲名古屋に於ける全國川柳家交誼大會後報がガール名古屋川柳團から發刊された。

消息

▲脇田梅子女史（大阪）引率の帝都海上旅行見學團は五千七八百人、鳴門觀潮や大阪灣遊を

された。尙八月十四日から皇軍の武運長久祈願の大阪學童と共に上京、啞三味、花戀坊諸君に逢はれる筈。「茶漬なら茶づけでもよし差むかひ」の句を寄せられた。

▲西田紳樂君（大阪）は防空演習に狩出されてゐられる由。催涙ガスや焼夷彈の説明に川柳そつちのけの慮。

▲橋本綠雨君（大阪）は勤務疲勞のため神經衰弱の氣味であるが七月十七日松本へ、十八日白馬岳登山、十九日燒岳を極め二十日淺間温泉で民郎君と快談された由。

▲月原宵明君（愛媛）の母堂は中耳炎のため手術され七月十三日退院された。

▲富士野鞍馬君（東京）北海道の旅から歸りよけい暑いやうですの御便り。

▲安川久留美君（金澤）は七月七日來阪、本社例會に出席句會散會後路郎主幹東魚、葎乃、紳

樂、變人、白峯君等と竹葉亭で
歡談されその夜は大阪パンシ
ン一泊、翌日路郎主幹と共に神
戸、舞子、垂水等に遊ばれ歸澤
された。

▲鳥生古弗君（廣島）は七月五
日六日の休暇を得て今治へ歸省
され、柳石、一帆の諸君に逢は
れた由。

▲渡邊曉童君（今治）は近頃多
少健康を損じてゐられる。

▲西いわを君（大阪）は七月十
四日商用のついでに堅田の浮御
堂に遊ばれた由。

▲村松夢裡君（大阪）は商用で
七月十六日今治へ出張、十九日
藝備銀行今治支店の宵明、心府
の二君を訪れ歡談された。尙曉
童君は徳島行の舟を見送られた
由。

▲大窪文芳君（名古屋）は七月
十六日來阪、本社訪問、同日松
山へ赴かれた。

▲淺田紋二郎君（金澤）は病氣

保養の爲目下石川縣金石町尾山
方に轉地療養中である。



▲上京された森東魚君（川・協
名譽會員）を圍み七月一日鳥森

の古今亭で歡迎宴を催し佐保關
君も出席された由。尙三日は旗

坂本遠見路君

送別句會

前列向つて右より

波島、紳樂師、遠見路、路
郎師、路風、麻斗

中列向つて右より

ゆする、一夫、美知夫、葉
峰、紫浪、利次、素朴、修
三、峰月

後列向つて右より

守夫、千峰、力夫、鴨路、
榎夫、南濃路、四一の諸君

吳海兵團入隊
報句は次號に

洗莊に於て偶會を催し、花菱君
の外雀郎、也奈貴、苔蟲、壽橋

君等の寄せ書を頂いた。

▲戸倉普天君（兵庫）は七月九
日塩原から、三日間「温泉巡り
を思ひ立つて老婆帶同北陸から
信州、塩原へと参りました。」と
のお便りを頂く。

▲蛭子省二君（朝鮮）は梅雨季
のため又々病勢逆戻り、注射や
ら服藥やらで過してゐられる由
御同情申上げる。

▲塚越正光君（川・協名譽會員）
は岸本廣告研究所に入社七月十
六日來阪された。

▲須崎豆秋君（大阪）は近時多
忙で京都や伏見の工事場で陽に
焦けてゐられる由。

▲北海道川柳リレー大會も無事
終了し、湯の川温泉で休憩中の
晟修、不浪人、雀郎、三大郎の
四君から寄書を頂く。

▲石崎柳石君（今治）は七月二
十七日發の北アルプス白馬岳
黒部峡谷を探る學校山岳部に参
加して歸途八月一日頃來阪され
る便りに接した。

暑・中・御・伺

龜井晟修 函館市青柳町五〇	川柳雜誌社松山支部 幹事 酒井大樓	川柳雜誌社大鐵局支部 畔柳社 大鐵局經理部調査課	川柳雜誌社 廣島支部
川柳雜誌社名古屋支部 幹事 吉田水車 名古屋市中區南大津町 共濟ビル 山武商會	北山悟郎 大阪市東淀川區本庄 川崎町三ノ二三	今川棕影 愛媛縣喜多郡大洲町	川柳翻譯研究會 東京市小石川區初音町四 阿部佐保蘭方

▲本社廣島支部の森田翠洋君は大鐵局に轉勤される事になり七月二日葉留路君の宅で十三名集合、送別句會を開催された由

▲坂井正胤君(尼崎)は北支事變のため動員されたが、健康がゆるさぬため歸郷された。同君の遺憾を思ふ。

▲大島壽明君(川・協名譽會員)は七月二十一日は奉天へ二十五日は新京へ、元氣に活躍されてゐる。奉天では室内九十五度の由、新京からは左の句を寄せられた。「建設地こんなところにかが出來」

慶 弔

▲酒井美知夫君(兵庫)の宅では六月二十六日二男を安産され涯夫と命名された由お喜び申上げる。

▲岡田浮草君(愛媛)は結婚された由、祝意を表する。

▲池田可宵君(仁川)の令息は六月四日三才を以つて他界された由、遙にお悔み申上げる。

▲平瀬島雄君(東京)は六月二十三日逝去、哀悼の意を表する。

▲田中都之介君(松江)の尊父は七月八日逝去された由、遙かにお悔み申上げる。

暑・中・御・伺

池田可宵 仁川府宮町	長崎柳秀 大阪帝國大學醫學部	前田五健 松山市真砂町二一	小林不浪人 青森市浦町橋本二八三
富士野鞍馬 東京市杉並區高圓寺 六丁目六八五	住田亂耽 兵庫縣武庫郡魚崎町五九 八ノ二 電御影二八五七	中見光路 大阪市西成區粉濱 西之町三ノ三	藤村亞鈍

▲小原吉左右君は（神戸）病臥中の處七月十日逝去された由、哀悼の意を表する。

轉居

▲坂本遠見路君（吳海兵團第三十七分隊第三教班へ）▲せんりう社（東京市澁谷區代々木初臺町七一五へ）▲御所車川柳社（京都市上京區烏丸通上立賣上る今村良之祐方へ）▲中村琴泉君（大阪此花區恩貴島北之町二二へ）▲森田一二君（金澤市古道鐵道官舎へ）▲塚越正光君（大阪市住吉區住吉町一三三四アパートアケボノへ）

其の他

▲加能川柳社（金澤）では六月號から誌代を十五錢に改正する
▲柳風會發行の（湯の村）は六月號をもつて創刊五周年を迎へられた。
▲「川柳俱樂部」（東京）も同様六月號から一部二十錢に改正。
▲柳樺寺川柳會（東京）では改題後の柳誌「川柳人」の等二號（五・六合併號）を刊行された。同號より大谷五花村君が井上信子女史に代り發行兼編輯人となる事を發表された。



編 輯 縦 横

少し書いては休み、少し書いては休みして漸く印刷屋の手へ渡すまでにした。従つて「川柳名句評釋」は休載して、一昨年大阪朝日新聞に掲げた「川柳に見へた親こころ」を轉載して御寛恕を願ふこととした。

▼こんな時に笠原博士が長崎博士の句を獨逸譯された「川柳の翻譯」の寄稿は有難かつた。これに「異國に住めば」の異香あ



るページを編むことが出来、特輯號の格好がついた。

▼連載物の「日本名所物川柳」や「喫茶店のAとB」などは特輯號にはわざと抜いてみた。「指導講座」は講師の身邊が近時多忙だったので、次號と併せ掲げることになったのであるか

ら諒とせられたい。

▼「青空の下の句會」は記事も寫眞も常住幹事の清水君の手で出来た。臨南寺の寫眞を入れたのは前號の葎乃の記事へ入れる筈が間に合はなかつたので本號で併せ掲げたのである。

▼大阪は今、防空演習と相俟つて戦時氣分横溢、千人針千人力で百貨店の入口も、驛の改札口も、道路といふ道路がそれ等の入々で身動きがならない有様である。自分も外出先で千人力の筆を押しつけられ、右手の自由を失つてゐるからと云つて、むげにもことわりきれぬので左手で漸くその責を果すといふ始末

動員々々の聲が各會社の廊下まであふれてゐる。銃後の後援會が組織される。出征軍人の見送りで萬歲々の聲が到るところにあがる。南海電鐵へ行つたら、阿形一杉君がうちの會社は五十幾人動員されましたとそ

柳 誌 要 目 (六月號)

▼武玉川三編研究(六)

秋の屋・東魚・省二(川柳雜誌)

▼川柳名句評釋(一一)

麻生 路郎 (川柳雜誌)

▼日本名所物川柳(京都の巻)

山川紫明選・朝賀大鱗畫 (川柳雜誌)

▼川柳壇無能論

藤村 亞鈍 (川柳雜誌)

鑑賞十句(柳柳初篇から)

櫻井 六葉 (梅 鉢)

▼中道を往く

北村白眼子(川柳うしほ)

▼新興川柳運動を願ふ

渡邊 尺蠖 (川柳人)

▼十年以前の句さ人

島田 雅樂 (氷 原)

▼手記から

磯部天邪鬼 (川柳地帯)

▼これでいゝのか(川柳時評)

塚越 正光(川柳きやり)

▼作家の青年性・純粋性

中井苑村郎 (昭和川柳)

▼川柳雜語考

世話役で大重だった。従つて川

柳人の出動も相當の數に上つて

ゐると思ふが、今のところ、誰

さ誰だかハツキリしない。祖國

のために特に奮闘を祈る。

▼「近作柳樟」欄の投句がゲン

く増えて來たし、「川柳塔」も

久し振りの顔が並んだのはよ

ろこばしい。

▼名古屋支部の句報は創立句會

のこさでもあり、名古屋の鈴々

たる人々の應援に感謝の意を表

するため特に別欄三頁を費して

發表することにした。記念撮影

は全出席者をカメラに収めるこ

とが出来なかつたので各位の雅

號を發表することを差控へた。

お宥しを乞ふ。

▼八月の例會は休むことにした

何か特別の會でもやりたいと思

うが、今のところ世間もかなり

騒がしいし、慰問川柳會なんて

場あたりめいたことをするのは

いやだしまだどうするかに就い

てはハツキリしてゐない。急に

催すやうにでもなれば特別に案

内を出す積りであるが、多分涼

しくなるのを待つことになるだ

らう。従つて青空の下の句會も

▼柳多留四編論講

花岡 百樹 (三味線草)

▼柳樟寺今昔物語

小池蛇太郎 (湯の村)

▼鑑賞眼は移る

相元紋太(ふあうすこ)

▼川柳指導講座

本社の指導講座は平易懇切、

全く手を取らんばかりにしての

講座振ります。川柳を作りたい

が、どうしたらいいかと迷つて

ゐる間に、五七五中心に、課題

によつて作り、本講座へ送られ

川柳
雑誌社

八月例會

會 休

謹しみて

暑中御伺

川柳雑誌社

大阪玉出本通三・電話天下茶屋二五七九

前號正誤

三七頁下段一行目山本丹治は山
本丹路の誤

講師 塚越正光先生
課題 「風」一人一句
締切 八月廿日

本社宛「川柳指導講座句稿」を
明記する事

(順はろい) 々人の係關社 伺御中暑

生山永西福高橋不朽
★田本里田山橋洞
翠丹十艸雨か會員
夢路九樂樓る緑



妹吉市村姫朝水北岩
尾田塙松田田谷山崎
變水食夢夕新鮎悟柳
人車子裡鐘水美郎路

石明宮後西松春須大
曾石岡藤下元崎西
根柳白霄い小紀豆八
民柳峰兒を子太秋歩

鳥加近江原大中西
生藤藤江戶鶴お
古ライみつ史喜さ
弗ト勇る風由む

主幹 麻生路郎

川柳雜誌社

長長長田嘉笠片岡大長池
野岡崎中納原岡本道谷澤
晴半柳辰二純生方平雄樂
濱郎秀純生方平雄徹居

客 末淺赤類藤藤國
員 弘田井原本村枝
沖鳥伊 嚴太清退之史
野山藤 三彦助作郎
岩一彦
三郎步造

高生谷田米川川龜小大
尾方脇村村上井西大
亮敏素孝あん三川長谷
雄郎文介馬菱郎修武郎村

森小藤姪篠柴食前前安
林里子原谷滿田田川
東好不省春宰南五雀銀
魚人古二雨郎北健郎波樓

事幹と部支

名古屋支部(名古屋)	廣島支部(廣島)	兵庫支部(神戶)	臺中支部(臺中)	十支支部(廣島)	竹原支部(廣島)	伯耆支部(鳥取)	光笑支部(大阪)	今治支部(今治)	光里支部(大阪)	西條支部(愛媛)	大鐵局支部(大阪)	松江支部(松江)	御池橋支部(大阪)	鶴町支部(大阪)	天王寺支部(大阪)	松旅支部(大阪)	鳥取支部(鳥取)	京都支部(京都)	藤川支部(和歌山)	梅邊支部(和歌山)	高知支部(高知)	函館支部(函館)	神戶支部(神戶)	九支支部(大阪)	道頓堀支部(大阪)
吉田	濱田	三崎	宮内	淺野	松井	永田	月原	市場	荒井	山本	西谷	宮岡	須崎	酒井	中島	明石	辻	水谷	國澤	龜井	北山	庄萬			
水車	久米	陽幸	耕期	牧笑	美笑	十九	宵明	見食	賀夫	喜山	兒	白	豆	鐵	柳	之助	左馬	貼美	春水	晨修	悟郎				

川・雜・案・内

六原活字十四字三行金五十錢（行増す）
 改刻、移轉、金十錢（但前金切手代用可）その他
 改刻、移轉、金十錢（但前金切手代用可）その他

川・雜・句・箋

「川柳雜誌」への投句
 は樹形の美しい投句用
 箋をお用ひ下さい。
 句の書き心地もよい
 し、選者が選句される
 のにも、便利なので特
 におすゝめいたします
 送費は本社で負擔いた
 します
 八十枚綴 一冊 金十五錢
 同 二冊 金廿五錢
 御申込は川柳雜誌社へ
 〓切手代用も可〓

種本録雨著 麻生路郎序

川柳街の雜音

定價 五錢
 送料 四錢

☆作家生活十三年、黙々とし
 て吐き出した著者その儘の生
 きた姿、一讀再讀人生の底邊
 に觸るものあらん敢て薦む

染筆頒布

路郎先生筆、掛軸、横額小
 物、短冊を川柳家に限り左
 ので頒布致します
 軸箱入二十圓・額 二十圓
 小物 五圓・短冊 三圓
 御申込は前金で發行所へ

合本特賣

川柳雜誌の合本第二巻より
 第十一巻まで
 各一卷 金壹圓五十錢
 第十二巻及第十三巻 金參圓
 送料大阪市内 一冊六錢
 市外 一冊二七錢
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

後の葉柳を頒つ

大正八年に出してゐた「後の
 葉柳」の残本が僅かばかり出
 て来たのでお頒ちします。日
 車、中文錢、路郎の三氏の句
 しか載つてゐない樹形四頁も
 の全三部で十錢、二錢切手五
 枚お送り下さつてもよろし。

川柳雜誌社宛

百號記念大會（兼題吟募集）詳
 細ふあうすと八月號一部廿錢
 神戸花隈 ふあうすと川柳社

「大正川柳」第五一號及び第五
 八號相當の代價にて譲受けた
 川柳雜誌社内B生

▼本社八月例會を休會とし九
 月例會日は九月號に發表
 川柳雜誌社

懸賞川柳

課題「飛行機」八月十日
 「ボマード」九月十日
 用紙は官製ハガキ（化粧柳境
 と明記の事）選者麻生路郎氏
 秀逸數句に謝辭を呈す
 宛先 大阪市西成區玉出本通
 三ノ三六 麻生路郎氏方
 化粧新聞社柳壇へ

殘本分譲

川柳雜誌の殘本が少數宛あり
 ますので、左の通りで分譲申
 上ます
 第二巻より第三巻迄 一冊 十五錢
 第四巻より第十二巻迄 一冊 二十錢
 第十三巻 一冊 二十錢
 （送料一冊一錢）
 御申込は前金で川柳雜誌社へ

川柳を作る人愛好する人の必讀
 誌毎月一日發行一部廿錢送料錢

川柳俱樂部

東京市牛込區湯場町八
 川柳俱樂部社

川柳草薙

東海の代表誌
 一部一錢一年一圓（郵稅共）
 名古屋市南區八熊町
 寺田一五〇

發行所 草薙川柳社

川柳きやり

菊判每號七十數頁
 毎月一日發行一部廿五錢
 東京豊島區高田本町二ノ一四
 六八 川柳きやり吟社

川柳氷原

一部二〇錢一年貳圓（郵稅共）
 小樽市花園町田中尚子方
 發行所 川柳氷原社

月刊 みのく

一部十五錢一年一圓五十錢
 青森縣黒石町
 發行所 川柳みちのく吟社

酒

清

白鶴

ハクツル

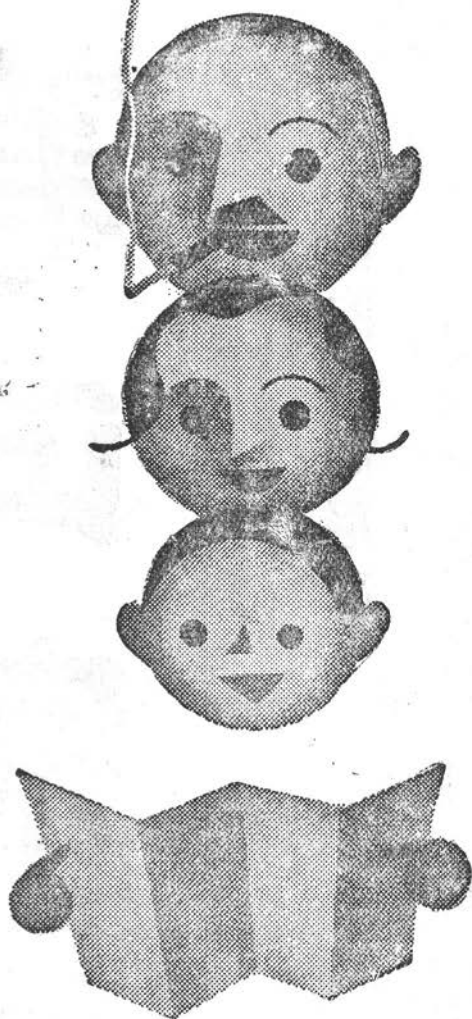


元齋發

社名合納嘉

天奉・連大・川仁・城京・戸神・京東・阪大

たしかな保険・たのしい家庭！



日本生命

(登録案内贈呈)

大阪・今橋

菊正宗

宮内省御用達

株式會社

本嘉納商店

推 士博學醫林楷
査 士博學醫瀨片

錠 ムーユシルカダブ

安産

母性愛の達成へ

母性愛の發露たる妊娠は眞に女性にとつての重大任務であります。更にこれを達成せしめることはワダカルシウムに任じます。即ち母体と胎兒の保護營養に任じ、悪阻期を安全に経過せしめ、偶發する諸病を未然に防ぎ、子宮の收縮をよくする爲め安産せしめますから、お産の守護神として御信任を頂いてゐます。更に授乳期には、母乳を豊富にし、乳質を改善する外、母体の容貌、毛髮、齒牙の悪化を防止し、乳兒も随つて健やかに育成されますから、凡ゆる女性を朗かな圓滿な家庭の人とします。

片瀨醫學博士述「安産のために」進呈

のために

代時ムーユシルカ てし設建を

茲に二十年、幾十萬の妊娠婦諸姉が、「ワダカル」の偉力を禮讃せられつゝある事實と、我國カルシウム學界の泰斗、大阪醫大教授片瀨博士の、二十年一日の如き熱意と努力により、不滅の城域を築き得ました事は、弊店最大の誇とする處であります。

安産！安産！安産のために
「ワダカルシウム錠」



店商助卯田和 町修達貢大

投稿規定

▲投句は本社發賣の投句用箋、官製葉書又は同型の厚紙に各種各題必ず別紙に認め、住所氏名雅號を明記する事。

▲「近作柳橙」は全家の雜吟を募る。

▲「川柳塔」への投句は川柳人協會の役員に限る。

▲各地會報は半紙判原稿紙に清記の事

▲文章は二十字詰原稿紙使用の事。

▲書體はなるべく階書「川柳雜誌原稿」

▲封筒に朱記の事

▲締切は厳守されたし。

▲投稿其他につき御問合せはすべて返信料封入の事。

募 集

第十四卷第十號課題

八月十日締切

(十句以内)

庭下駄 相元紋 太選

齒痛 生田翠 夢選

第十四卷第十一號課題

九月十日締切

(十句以内)

汽車 福田山雨樓選

恩給 酒井大樓選

每號募集

近作柳橙(雜吟)麻生路郎選

各地柳壇(會報)

文章(評論研究感想吟行漫文漫畫)

價 定

一 部 金三十錢
半箇年前金(特輯號共)壹圓八拾錢
一箇年前金(特輯號共)三圓六十錢

料 告 廣

本誌への廣告に就いては發行所へ直接御一報下さいませれば御相談に應じます。

○御送金は振替口座大阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實です○諸代受領は送本によつて御承知願ひます○送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金下さい○御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける様に願ひます。但集金郵便(一年分)には定價の外に手数料十錢を申し受けます○御注文には何月號よりと御指示願ひます○轉居又は改號等の節は舊新併記の事

昭和十二年七月廿五日印刷
昭和十二年八月一日發行

第十四卷 第八號
(毎月一回一日發行)

大阪市西成區玉出本通三丁目三六番地

禁 無 斷 轉 載 編輯兼發行印刷人 麻生幸二郎

發行所 川柳雜誌社

電話天下茶屋二五七九番
攝替大阪七五〇五〇番

支社 東京市蒲田町女塚町二〇三
川柳雜誌社東京支社

店書捌賣

(大阪)大賣捌大寶書店 參文社 明文堂 朝日ビル書店
其他市内各書店(東京)だん東京堂 だん巖松堂やう吉岡書店
あま玉森堂 紀伊國屋 三味堂(神戸) 米田實文館(函館)
石塚(京都) 三宅(名古屋) 靜觀堂



中元の御贈答には

先方様のお喜びになる

松坂屋^の商品券

を

五圓以上御調進申上げます

Ⅱ 東京（銀座・上野）・静岡・名古屋・大阪 各店共通 Ⅱ

全館・最新式
冷房完備



爽涼の三越

御中元に
三越の品

御進物のまごころは良い品
によつてこそ始めて完全に
表現されます。

御安心願へる
三越の品

大阪

三

越



大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
昭和十二年七月十一日印刷納本 昭和十二年八月一日發行

川柳雜誌

（第一六三號）

定價金參拾錢

送料壹錢